



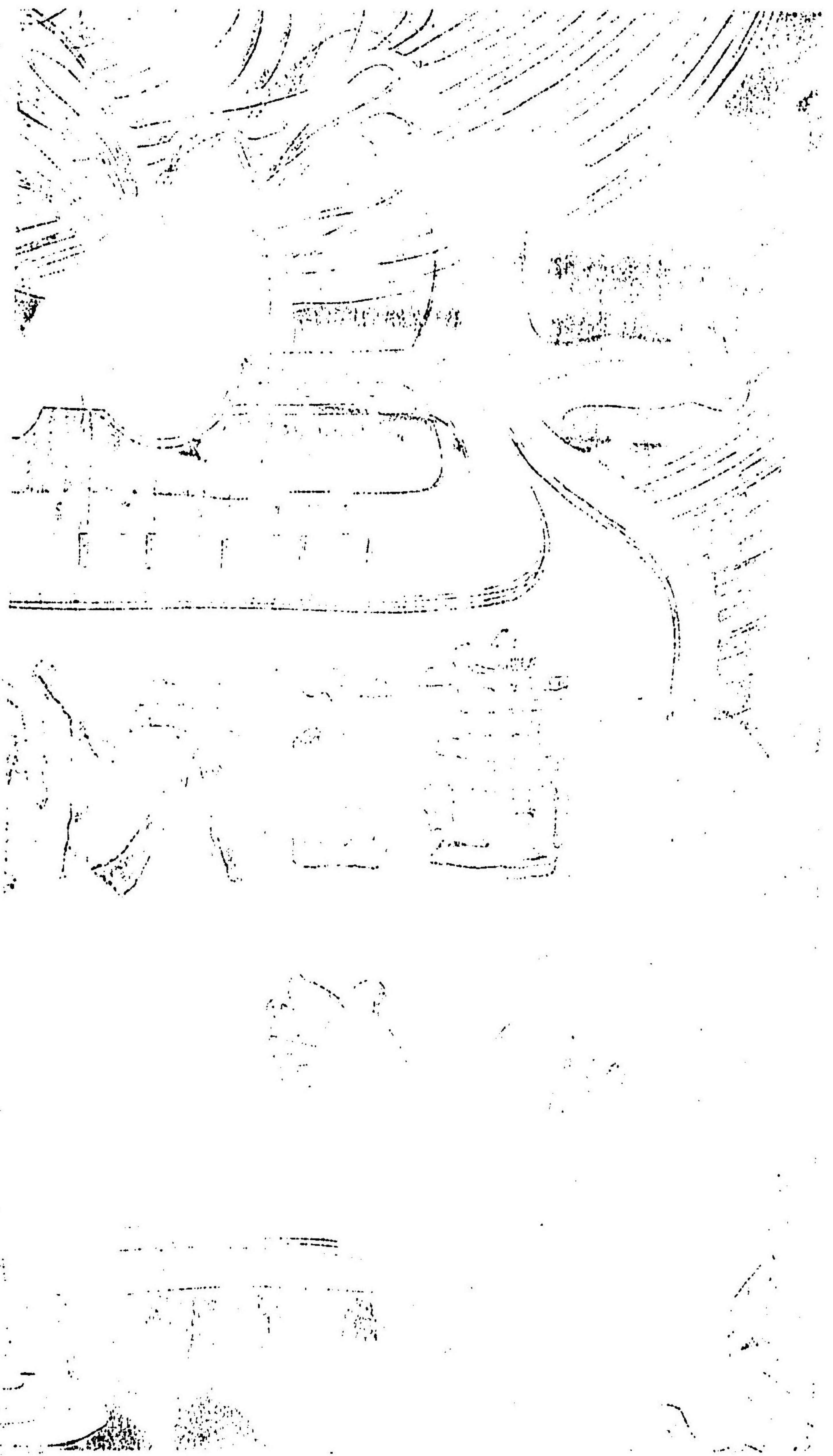
百天畫

東京滑靴社

藏版

265
833

特11
780



はしがき

鳥は山を低しとして其上に飛び、仙人は百年を短しとして木
死の薬を求む、生物の慾望は限りなきものなる歎、茲に於て
なきの面白味を爲さんがために、當るか常らぬか出砲の
無敵砲を發して人の腮を打外さんとす、彈丸が天まで届くか
届かぬか、そんな疑を抱く人は吃驚仰天して必ず腰を抜かす
事請合なり。

明治
44. 5. 5
丙寅

題仰天百書

奇想天來外入臆 忘心配又忘眉凝
 忽爲御齋轉屈 屹驚仰天叫快哉
 奇絕妙絕又珍絕 自始終迄盡仰天
 一讀忽覺無限快 再讀三讀不知眠

目次

好道地に墜つ……………二
 正義と金錢は逆比例なり……………二
 今光秀……………六
 精神一致……………八
 バイキングの圖……………一〇
 微菌之種々……………一〇
 月見……………二〇
 賢愚……………二二
 法螺專門學校の必要……………二四
 深淵……………二六
 虚榮……………二八
 不用意……………三〇
 歌の仲間入り……………三二
 竹取姫……………三六
 巨大狂……………三八
 急進の着物……………四〇
 取物……………四二
 着物……………四四

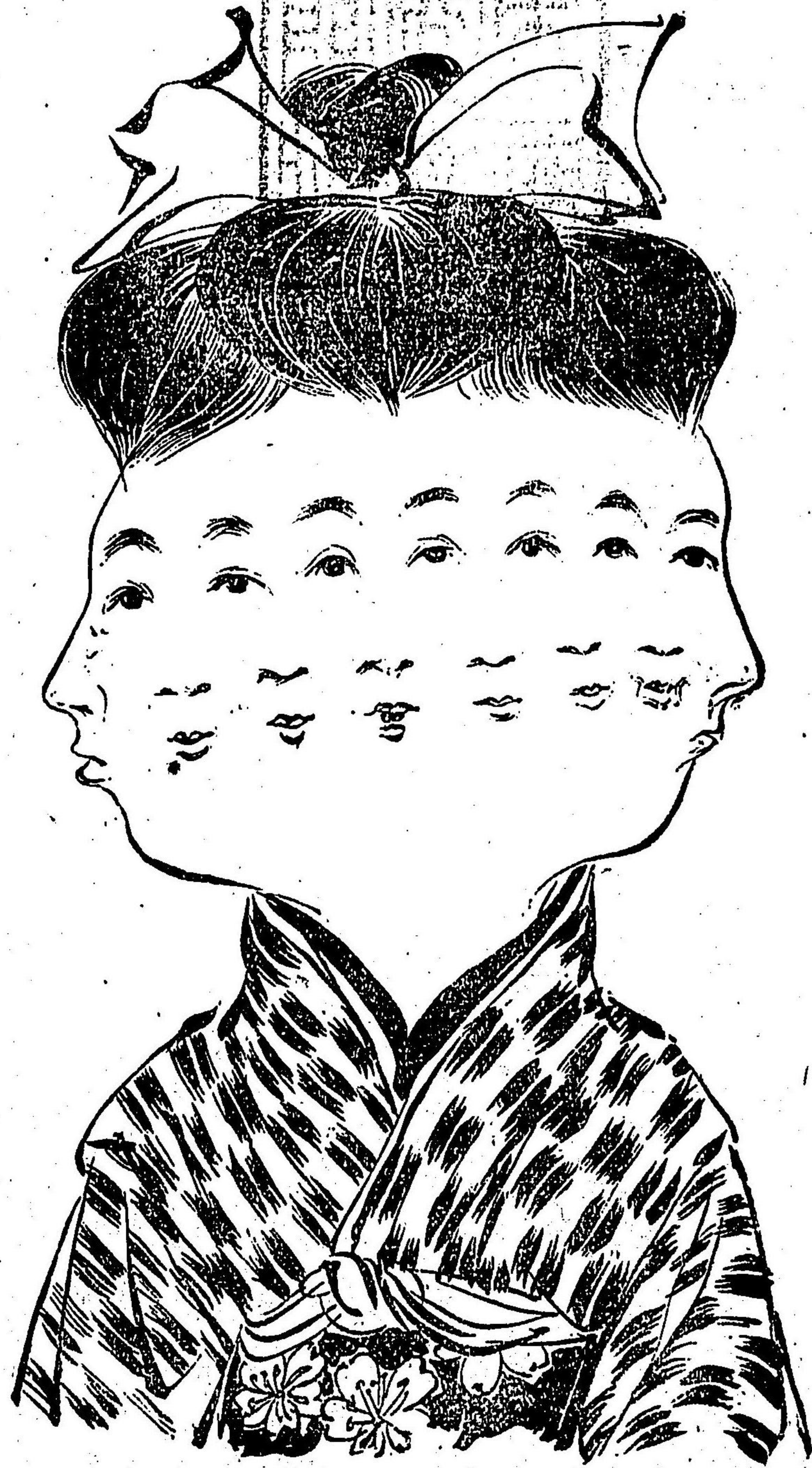
余が國のくづもの.....	三六
オーイヤだ.....	三六
錢の通過路.....	三八
石に流るゝ木の葉は沈む.....	四〇
河豚の鬨.....	四二
上等のフグ.....	四二
一種の武器.....	四四
借金株式會社.....	四六
落.....	四八
盲目.....	五〇
不孝者の源因.....	五二
馬馬を需む.....	五四
年のくれ.....	五六
陰堂.....	五八
聖經.....	六〇
馬鹿な政治家.....	六二
何んて間がいゝんでしよう.....	六四
巴に歸る.....	六六
大乗.....	六八
凡人は英人を見て出齒を感じ聖者は大乘を感じ.....	六八

酒に呑まらる.....	七〇
馬鹿の教師.....	七二
人か衣物か.....	七四
空中の財.....	七六
耳の製造.....	七八
聖は天にあり.....	八〇
俗は地にあり.....	八〇
飯と口.....	八二
頭崗.....	八四
若紳士.....	八六
怪物.....	八八
不公平.....	九〇
轉倒.....	九二
紙製の富士山.....	九四
鐵は監人の手にあり.....	九六
月給屋.....	九八
電火.....	一〇〇
外を見る目.....	一〇二
腕を磨く法.....	一〇四
神の心.....	一〇六

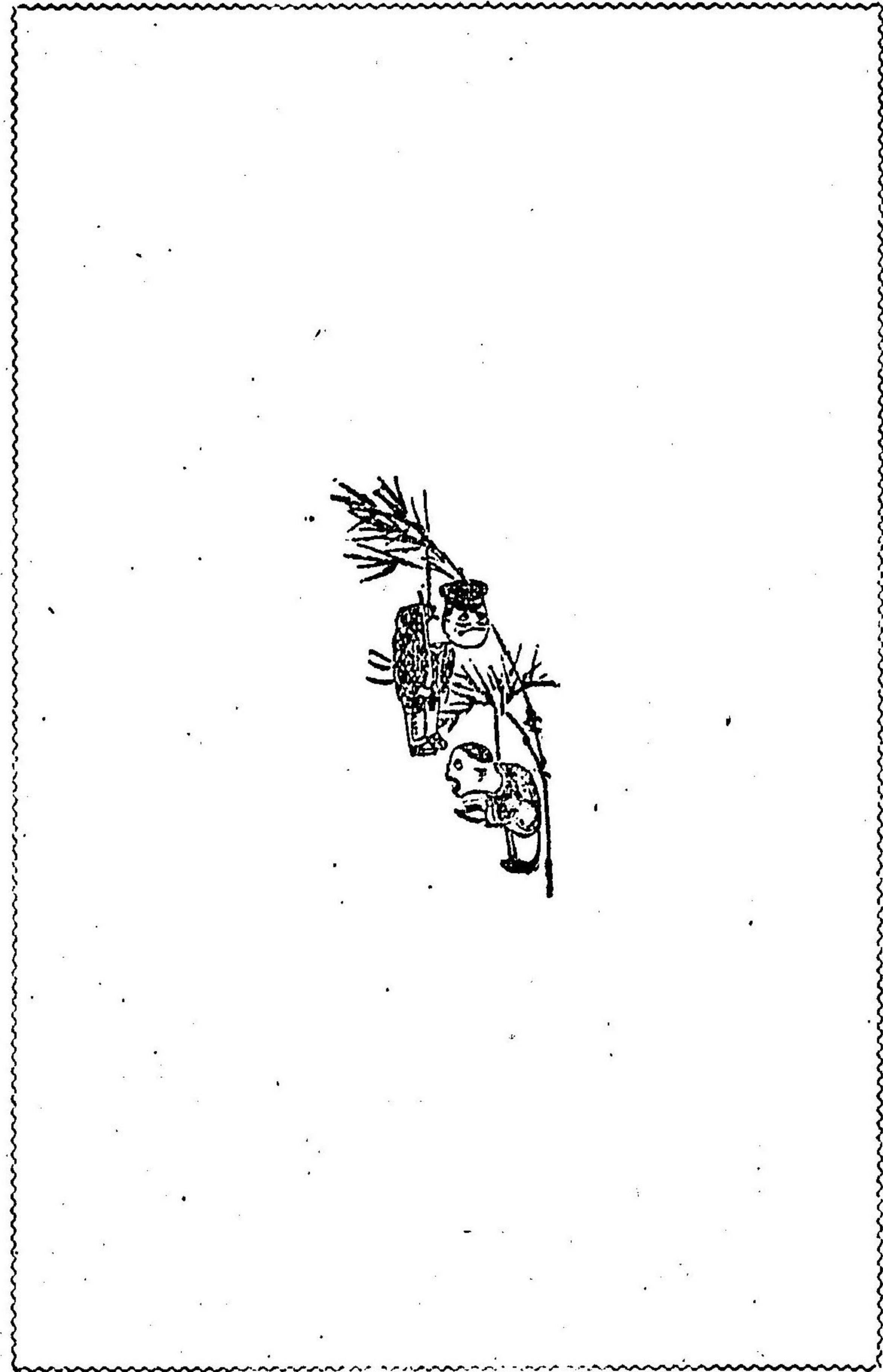
生活の基礎	一〇八
入	一一〇
現代の紳士	一一二
文化のおこり	一一四
風	一一六
腹の安否	一二八
寝食の質	一三〇
紀世哲等	一三二
悪風屋敷	一三四
三	一三六
皆	一三八
第一本	一四〇
危険々	一四二
信託地に置く	一四四
小僧と土蔵	一四六
米人排日の國	一四八
文明とは野蠻の稱號	一五〇
文明の肉食	一五二
腐肉強食	一五四
欲	一五八

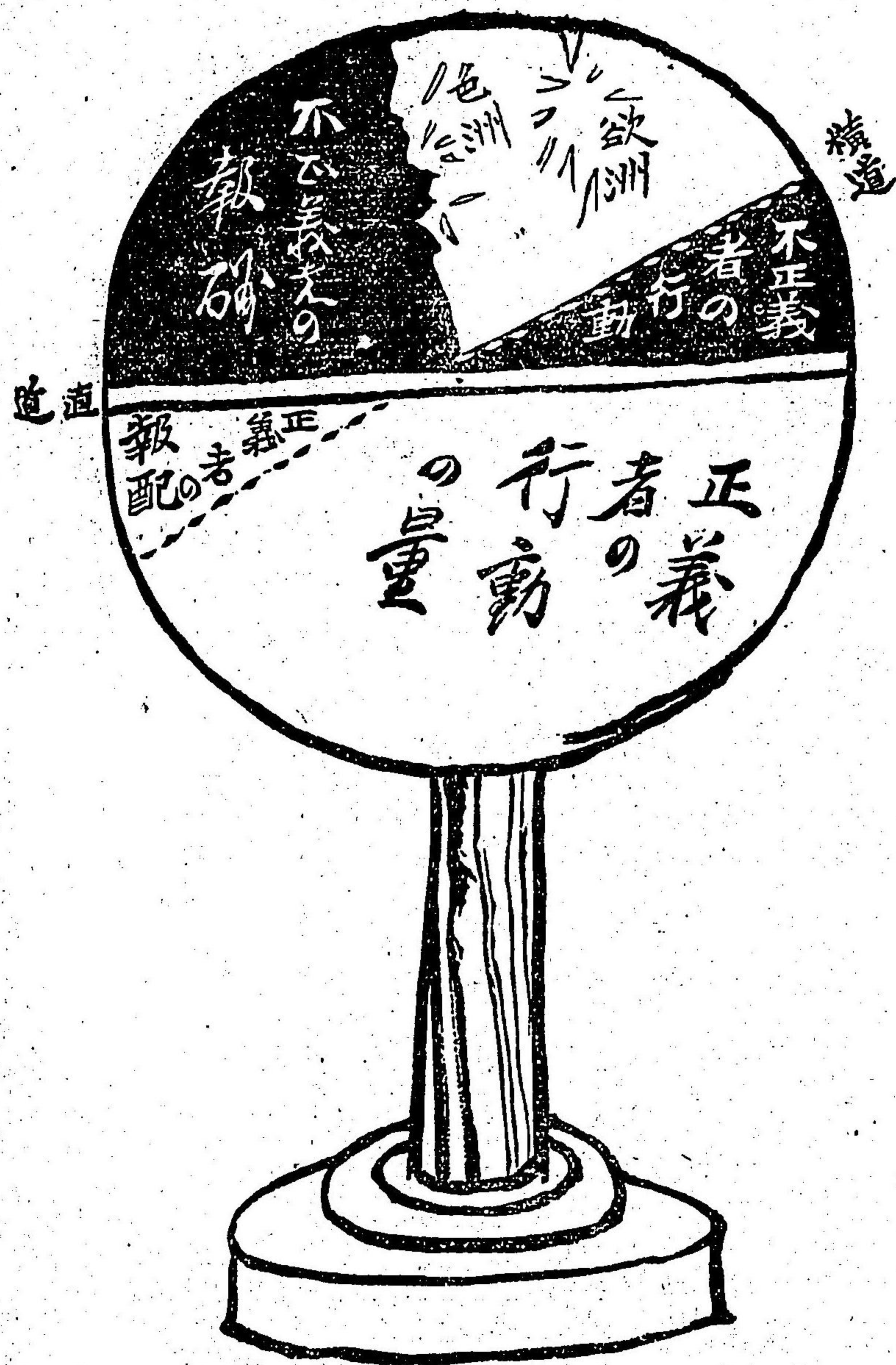
石	一四二
佛	一四四
未來の銅像	一四六
馬鹿連中	一四八
禮	一五〇
南無阿彌だ佛	一五二
大學の油學生	一五四
平和の碑	一五六
帝大入婿學校	一五八
暗示哲學	一六〇
奥人の影	一六二
無醫者の行列	一六四
知事とは如何なるものなりや	一六六
有給の案山子	一六八
文部の女子教育	一七〇
愛國の士と虚做	一七二
方	一七四
狂	一七六
マートル	一七八
酒の罪に非らず	一八〇

八面玲瓏



— (1) —





婦道地に墜つ

娘一人に婿八人あれば少くも一面の顔でも八方にら
 みをせざるべからず是れ至當の過報なり然し此頃の
 令嬢各位は八方にらみ切りにして未來永劫其主義も
 變せず伏姫の八犬を坐傍にひきゆるが如く折ふしご
 たくの起るも無理からぬ次第なり世の志氣ある男
 子は夢にも玲瓏の美人に近よるべからず

正義と金銭は逆比例をなす

世に地球儀なる者あり到る處の學校皆是れを以て地球の大體を知る事を得奎助氏茲に地球儀を作りて世に發賣せんとす世人以て如何となす地球儀の説明は一朝一夕にして盡すべきにあらず地球儀の説明は今や三歳の童といへどもこれをよくす地球儀の解や堂々たる五尺の男子と雖もこれを口にする事は容易なれども行ふ事は三歳の童におとる奎助の地球儀亦偉大なりと云つべし矣



今 光 秀

夕顔棚のこなたよりあらわれ出てたるすてきな美人、イヨ出張ツト言ひたかろうが、おさしさわりがある、お上でひかひをるぞ
 ……と聲がかゝつたからとて、ひつこむ、あにいじやない、大に出しやばる、出しやばる底の人あらずんば、混濁の現社會人類を排して何ぞ人後イヤ人先に出づるを得んや、夕顔棚ののぞきの美人、誰人の先鞭の光榮を得るや、行けく日本快男子



念力

山石を

通す

精神一致

古昔支那の人野に狩して獲物なし夕景に至り藪の下に一大老虎を發見し處を隔てて之を射る近よりて之を見れば岩石發矢鏃を没し居れり再び離れて二の矢を發す發矢根元より折る是れ矢には念力入らざればなり人間の念力は活殺自在力を有す古人暗中に怪物の出つるに遇ふ直に暗中に向ひて發矢す怪物立刻に散ず劍客師氣合をかけてランマを走る鼠を墮す事あり大閻白馬を叱して坐踞せしめし事あり雨中庭石に穴を穿つ事あり皆心念の集る處の決果なり精神一致何事か爲らざるの事業なし

管史曰く

之を思ひ之を思ひ又重ねて之を思へ然して達せざれば鬼神に通ずと

鬼社の會の徴





バイキンの國

ケンビ鏡を以て病原を見るは各醫の任なり、教育を以て人間を養生するは教育者の任務なり、二十世紀の今日新進改善のケンビ鏡は年々歳々輸入せらる、而して世は益々圖の如く混濁、腐敗、今やその極に達す、吾人は人間を見るケンビ鏡の出づるをまつや切なり。

微菌之種

方今世を擧げて混濁せりと叫びしは昔の漢學者が定まり文句であつたが、益々腐敗して種々の微菌を生じ、微菌は新微菌を生じ、新微菌は又新益々微菌を生じ、恐るべき勢を以て繁殖しつゝあり。今や社會はこの病菌のたのみに滅亡せんとするの危険に瀕せり、この微菌は教育の服薬も、道徳の注射も、法律の外科手術も功を奏せずと云ふ吾人はこの腐菌を退治して社會を健全ならしむる名醫の出でんことを望むや切なり。

お情な人



仰天百書

月見

月落烏啼て霜天に満つと吟ずる書生あれば、三更月を踏て來れ
と云女史あり、月見れば千々に物こそかなしけれと咏ずるあれ
ば月東天に躍るを喜ぶあり、春宵月に對すれば轉たパイ一を感
じ美人と千鳥足を運ばんと欲し、夏の月夜は水に映じて涼亦清
く、秋の月は鬼將軍の膽を寒からしめ冬の月は盲目の長くひく
笛の音と共に感慨亦無量、世に月ほど人の感を引く物はなし月
を待ち兼ね小利の金を貸すに苦しむ月掛金は遂に停滯して遂に
拂ふ事能はず人生と月は亦好詩題ならずや特に黒きこと漆しよ
りも濃き一婦人月に對して向ふむき圖に到つては天下の文人又
筆を投じて嘆賞せざるはなし女子の月見實に興味多きかな。

賢 愚

昔時奈良の大佛の大目玉落ちたり京洛中誰も之を入れると云ふ
 大工なし一人の惻念ありて之を引請け、ぬけたる目より入り
 中に落ちたる大佛の目玉を元の位置にはめ己れは鼻の穴より出
 て來り瞬間にして大金儲をせりと云ふ此時より知者の事を目よ
 り入りて鼻より出つと唱ふ近時に至りては人の目玉をぬくもの
 出て來り昔の如く脩膳するものなし然し此の人を知者の標本と
 なすに至れり世の變遷と共に人氣のおもむく處も變化せり。

世田具
 さよへん
 人



法螺専門學校の必要

世に法螺貝ほど重寶なものはない、僅か裏長家に住んで居ても百万圓の財産があると吹かれる、尋常小學を卒業したばかりでも大學を卒業したと云へる、この利器を使用するものは出世し、使用の出来ぬ奴は成功せぬのが現代の有様である彼方でも此方でも盛に用ひられる、政治家も實業家も皆法螺で固めて居る、紳士も紳商も皆法螺で皆法螺の世の中である、然るに法螺吹専門學校もなければ、大學に法螺科もなければ法螺博士と云ふ名もなきは不思議である。然し實際の法螺博士は各處に澤山にある



石をたぎと澤山ある

深 淵

自殺者は石を抱ひて水に入る是れ身の水面に浮ぶを防ぐ爲なり
 此仕方は必ず死する事請合也。人生の行路に當り社會の濁流を
 泳ぐに當り行路難くしばく溺れんとする事あり此時に當りて
 は精神にも心配を生し前後の進路を誤りおろく身を深淵に沈
 むるに都合能き場所に近づく事あり是等は恰も石を抱きて水に
 望むと一般至つて愚なる處世法なり人一生の中行路難に衝突す
 る事度々あるもの此時に當りて此危険より脱せんとせば須く志
 を沈め思を冷靜にして再考三考發展の進路を發見する迄は動か
 ざる決心を以てせば過誤に陥りて身を沈むる事なからんか

今
 之
 様
 は
 今
 嬢



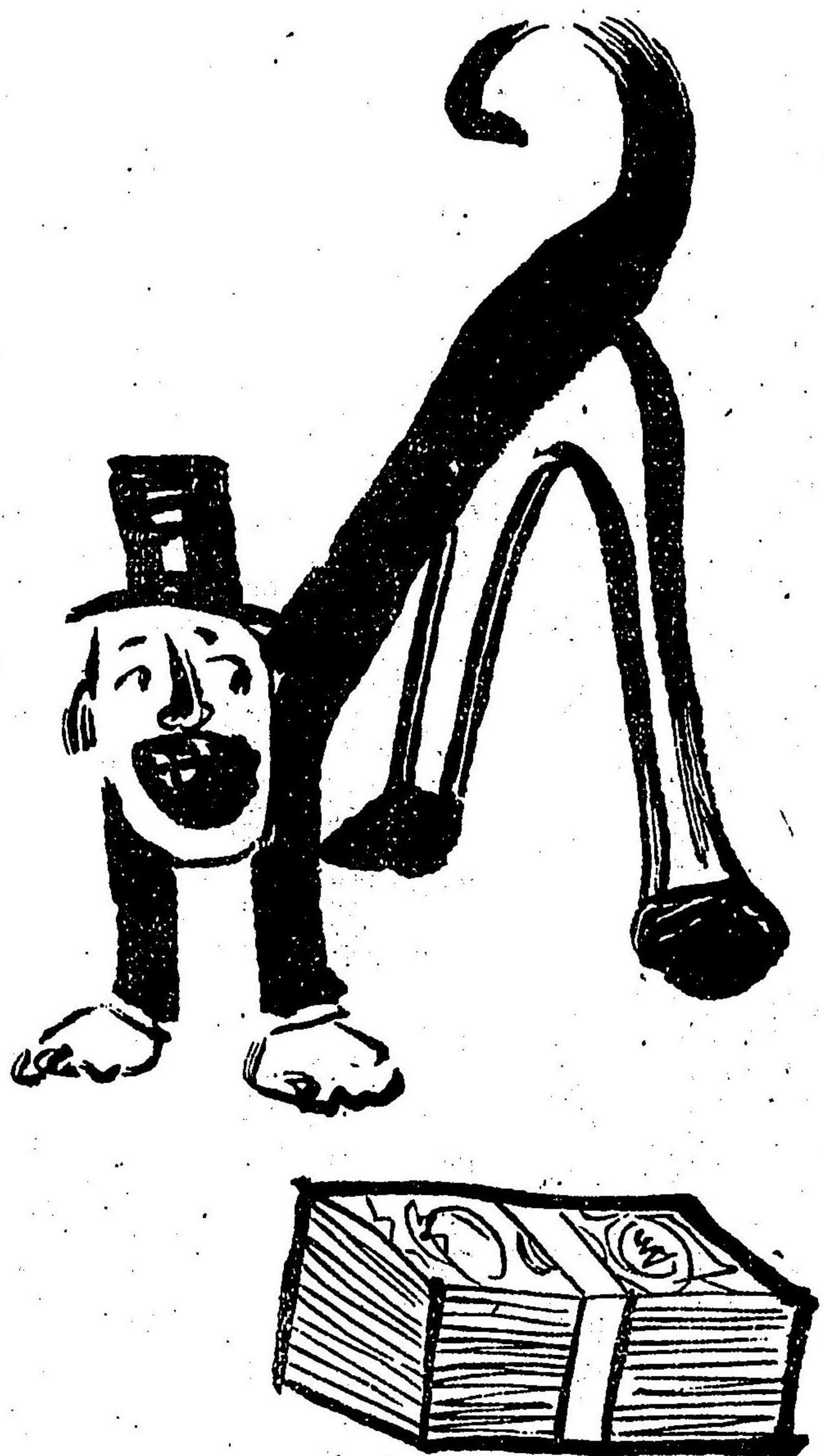
虚 榮

昔の婦人は外面如菩薩内心如夜叉なり今の婦人は外面はハイカラ、内心は虚榮なり、虚榮の權化たる今の令嬢は馬車に乗るを理想とし金の時計金の指環を希望とし虚榮の奴隸となりて煩悶し、伯爵夫人たらんと欲して老人の鼻髯を讀むかと思へば又博士の夫人たらんとし、或は良人の力量を満足せず男子を掌上に弄すること手球の如く虚榮のために婦人の節操をも忘るゝに至る、茲に於て虚榮は悪魔なり、この悪魔に呪はれたる婦人程極々仕方のないものはない、其害嫉妬の内心如夜叉より數等上である世間は此悪魔を退治してしまはない間は、女子教育をいくら施しても駄目である。



不 用 意

盗人を見て繩をより魚を見て網をつくろふ繩と網の出来上りたる節は盗人も魚も既に逃げてしまふ是れ皆愚人のなすわざなり盗をおさへ魚を取らんと欲せば平生に繩と網を備へ置き不時の用意足りて始めて其目的は達せらるゝものなり大軍の余が營所に近づくを見て矢を矧ぐ既に其用意を缺く斯る軍は敗を取るべし人間の事業萬事如斯



獸の仲間入り

今の人間は生活の道に向ひてのみ走る其あり様は恰も餓虎の肉を争ふが如し古昔の人は衣食足りて禮節を知りたるも今の人は衣食ありて尙くるる廻る金錢の前には道徳もなく節操もなく人道を過るもの比々皆然り虚榮に走りて己のが身の華美を充さんが爲にマンビキを働きたる軍人の妻女を出すに至る悪教育の風潮恐れて懼れざるべけんや議員は百圓で擒となり貞婦は五十錢で蛇となる此跡の變化はど一なるか





雨
この心

仰 天 百 畫

竹 取 姫

清風俗を拂ひて塵界を厭ひ星河の古郷を希望して上天せし竹取姫あれは逃げる淑女を己のが肉慾の餼食に供せんとして追ひ廻る老人あり若物を指導する歴史ある地位の老人でありながら身分も年齢も忘れて不埒なる漁りをなすもの上流社會に多し斯る毒蟲は寧ろペストより社會人生を害するの罪重し少しく自覺して然可

巨 大 狂

ネ君あの山で百万圓まうけて、あの株を買つて又
 千萬圓、先づあの土地を十万坪買つてあの内へ競
 馬場を十ヶ所建設して馬を千頭自分持として、つ
 らく家内のも千頭……これで一才と安心。その
 次にあの鑛山をたゞ買つて安く賣るさ百萬圓位
 で先づ妾宅を二十ヶ所……君そりや雲をつかむ
 ような話じやないかなアにこりや僕の理想さ

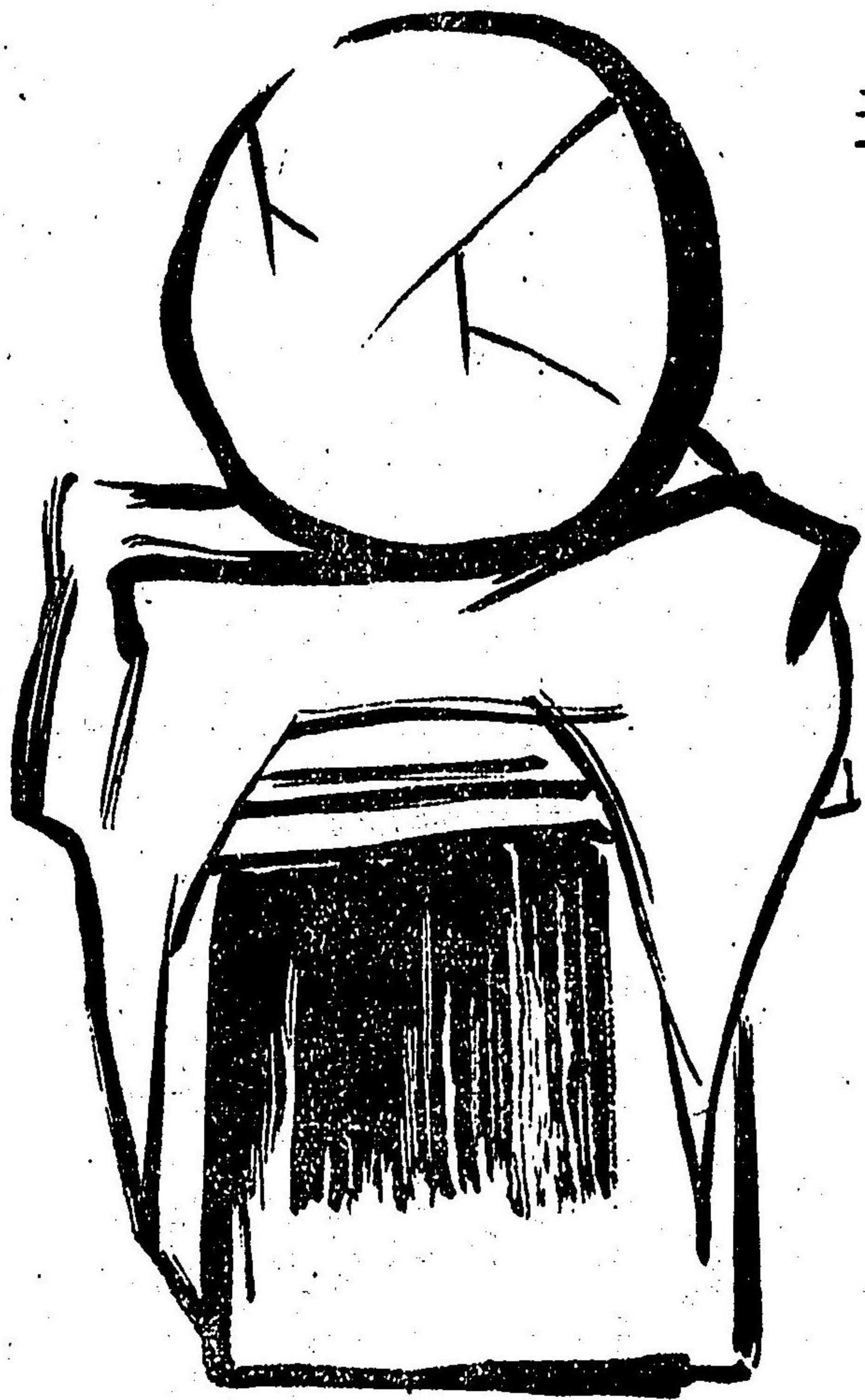
といふの
 初
 給



急造の着物

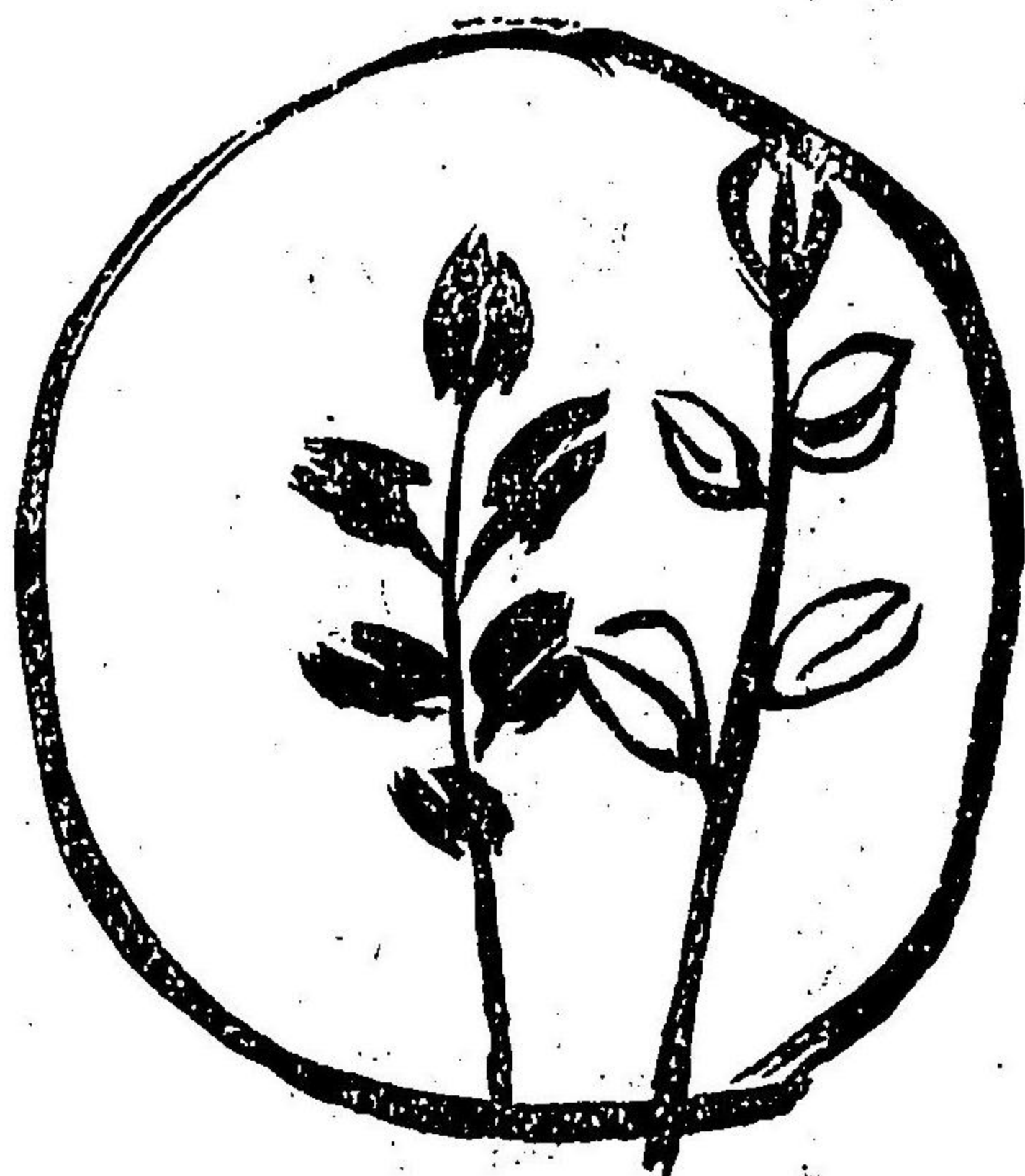
寒風颯々として人の袂を拂ひ、雪紛々として天地皆氷らんとす、
 此時に當つて破襦袢一枚を纏ひて打頭ふ、彼は金殿玉樓に起伏
 せし身の果なるか、はた悲惨なる運命に捕はれて零落の憂艱難
 を嘗めつゝあるの士か、然れども悲しい哉、一たび此類に入る
 時は忽ち怠惰に染んで亦起つ能はざるに至る、人は春を向へん
 とするに際し、吾身を顧みれば一枚の用意もなし、流石の乞食
 と雖も眼を覺して奮勵一番、韋駄天の如く馳けて熱汗淋漓忽ち
 得たる初袷、此瞬間の精神を以て平素の精神とせば乞食を脱し
 得んも、此精神を忘るゝ者は終生乞食を脱し得ざるべし。

玉に瑕



瑕 物

此頃は不景氣續きにて品物が賣れないと云ふ話しが商人間には八ヶ間敷なり新調の器物の賣れざるせい古道具屋に瑕物が多く飾りてある何品を見ても如何程上等の品でも皆瑕物になりて居る又動物の内でも戰場歸りの軍馬などは馬肉屋に賣るより仕方がない是より貴ひ人間に至りても此節は大概瑕物で無病のもの少いとこの経験家の話してある如何に瑕物繁昌の時代と雖も人間の瑕物に至りては困り入りたる次第なり子供を持つ親たちは何とか注意して瑕物を出さぬ様せられては如何



岩木の下で笠を

脱ぐ



廢 物

世に老廢物なる言語あり軍艦の如き鋼鐵製の堅きものと雖も終
 りには役に立たざるに至る此時は又新しき軍艦を製して國用を
 充たざるを得ず人間も此原則の内において始めの内は仕事は出
 來ても次第くは老廢に傾むき遂には老耄糞尿を人手に扱わせ
 るに至る斯る時代に至りては壯年のものに兜をぬき何事も若き
 人の指導を受くる事至當となす此頃政府には元老とか古株とか
 云ふ人間はびこりて國の進歩する事も不贅を表しごたくが絶
 へざる由とて苦々敷限りなれ

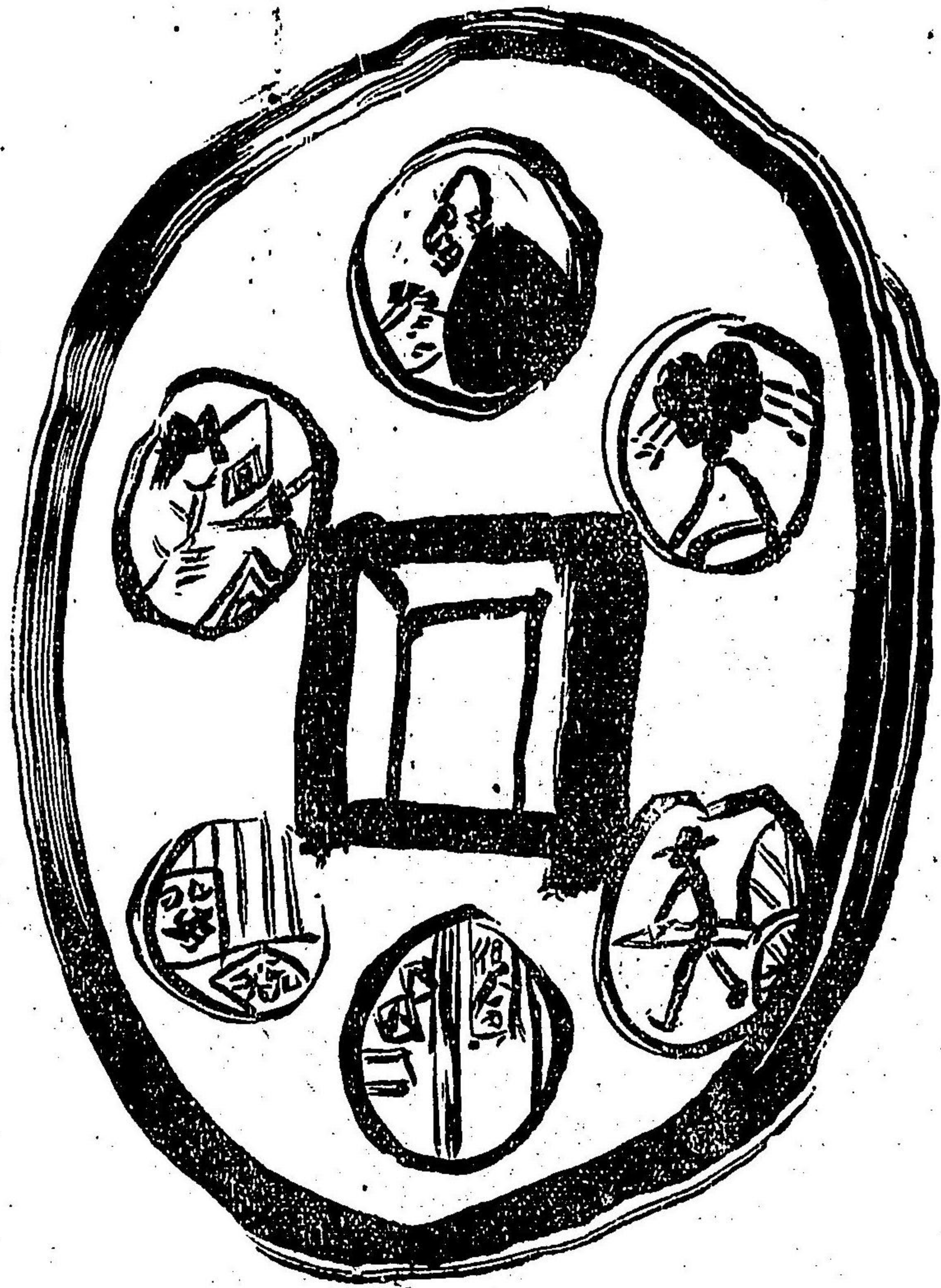


余が國のくづもの

鞍馬山に羽團扇持った、天狗様は、牛若丸に暗示を與へてあんな名將に造り上げた。今の御天狗さん連はやれ千里眼だ、何だ、彼だ、と却て人間に追ひ使はれ、それで一層鼻(呼吸)が荒いとはいやはや、鞍馬天狗も末世の天狗度し難きかね……

オーいやだ

自慢の鼻の高きこと三尺三寸三分餘り高過ぎるかゝる鼻を握られたが最後、上仰けと云へば上仰き、下仰けと云へば下仰かざるを得ない、こんな鼻を持った人は女にさへこの通り自由自在にされるから、まして男の手に掴まれたら最後どんなに利用されるか知れない。



錢の通過路

吾輩は錢である。朝には粒々辛苦の汗の價として拂はれ、夕には翠帳紅閨の夢を購ふの代となり、米となり酒となり月給となり家賃となり、更に轉じて貯蓄箱に入り芝居の木戸錢となり税金となり利息となり元金となり浮世の一喜一憂皆關係せずと云ふものなし。吾輩の前には人間も頭を下げ吾輩が無ければ英雄も羽根なき鳥の如く吾輩があれば愚物も龍に翼を添へたるが如し吾輩の勢力又偉大なる哉。



石は流るゝ木の葉は沈む

魚空に飛んで鳥淵に躍るこれ何の兆ぞ海は變じて山となり、山は崩れて川となるとも人道は變るまじと思ひしは仇なりき、石は流れて木の葉は沈む、逆にくと成果つる世は賭博を以て文明の交際道具と稱し、盲從するを文明の議員と唱へ、變節するを文明の政治家と呼び奸惡の富豪を文明の紳士と云ひ虚榮に走るを文明の婦人となす、之を以て見れば地にあるものは天に上り天にあるものは地に下るも決して怪むに足らず神もし靈あらば世界の改造を急ぎ給ふならん、出で、ノアノ洪水。

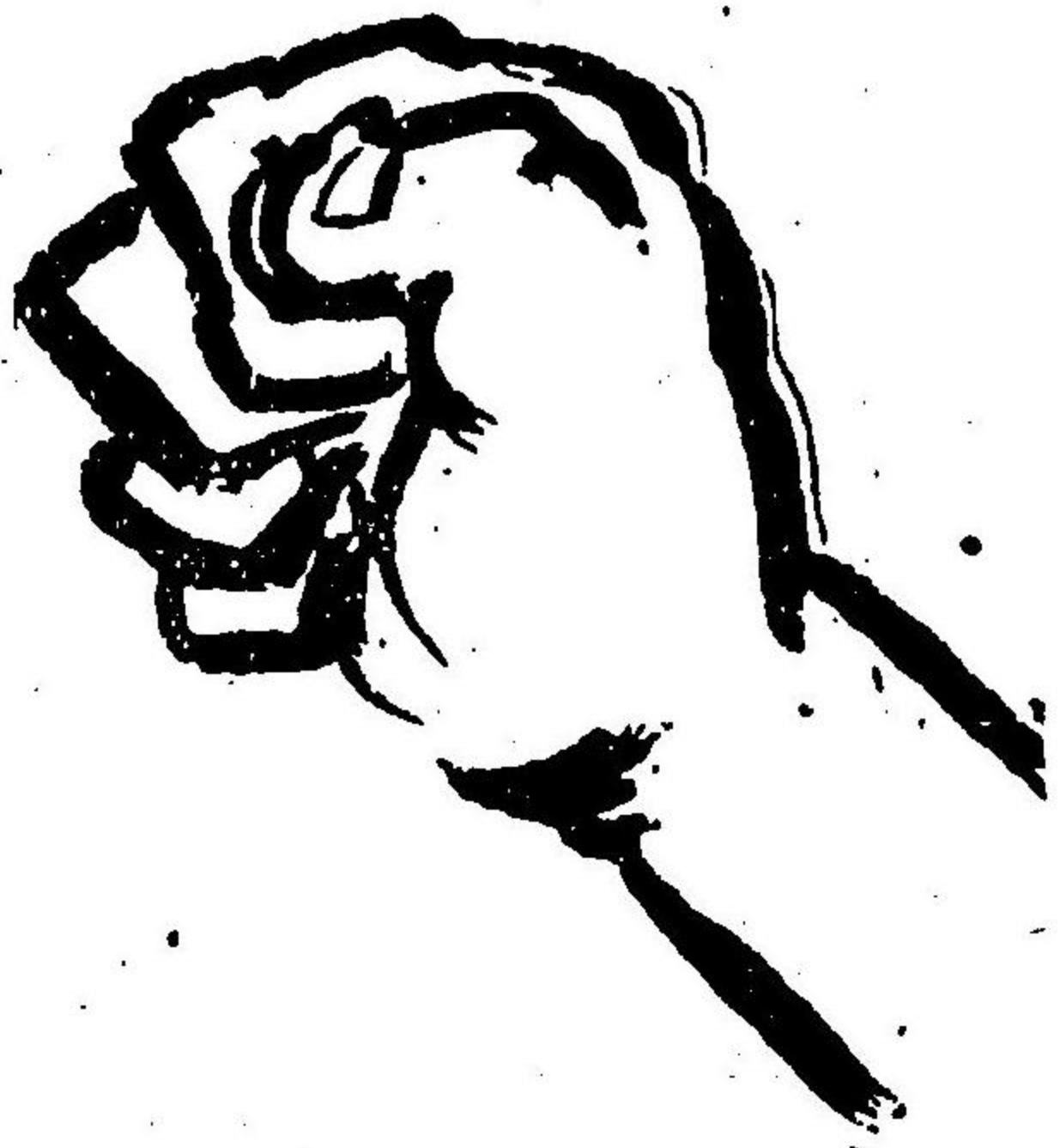


河豚の

河豚は食いたし命は惜しとはよく人の言ふ事だが食ふ人があるがどうして死なぬと云ふ野郎もある人間程度し難い者は又とあるまい金を蓄めるにはためるだけの方法がある河豚を食ふには食ふだけの料理法がある兎角勝手な人間は手を懐にして物を取りたがるこんな野郎は河豚を食ふて死すもあり猪子を食ふて鼻をかくも亦可なりよろしく日本男子又は美女はゆめく右の一條ふぐにすべからず穴賢々々

上等のフグ

河豚は食いたし命は惜しと之を役人に譯せしむれば賄賂はほし免職は怖わしと云ふてあらう小僧ならば摘み食はしたしお目玉は怖わしと云ふに違ひない令夫人は馬の足は食たし露見は恐ろしと令嬢は猪は食ひたし報いは怖はしと歎ずるであらう兎角河豚の中毒は恐ろしいものだその恐ろしいのを知つて居ながら食ひたいと云ふのが浮世の人情しかししかしいかに人情と云ふも道に背いた事は出来まい宜しく河豚を見て誠めとすべきてある

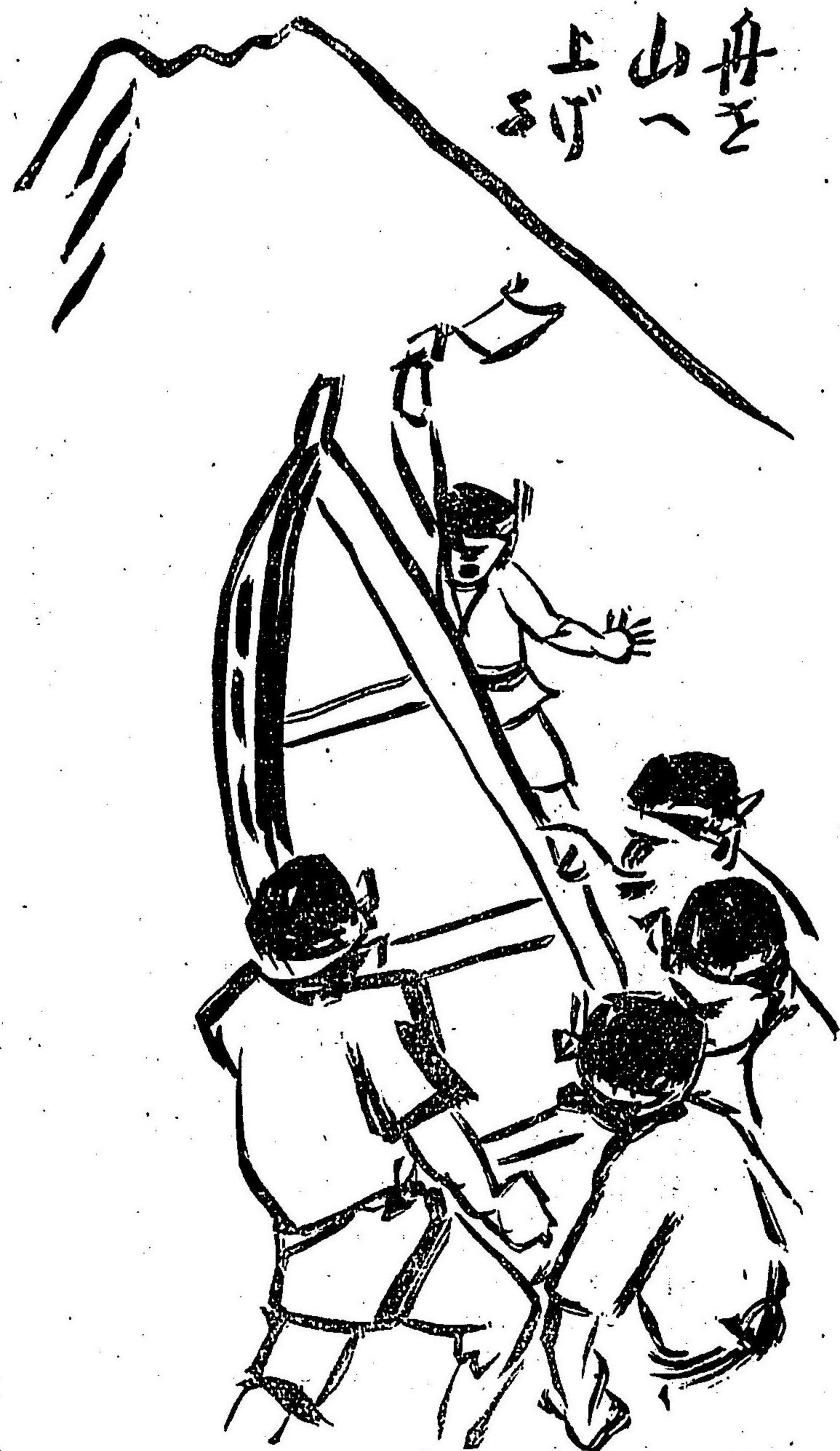


あはらば
笑ふかほに
思川
美



一種の武器

笑ふ門には福来る、泣顔に蜂がさす、と云ふ俚言がある、已れと振上げた拳も閻魔様のやうな顔をして居て呉れ、ば張合ひがあるがニコくと笑はれて居ては拳の下しやうがない苦虫を嚙潰したやうな顔をして居ると投らなくともよい頭でも張つてやり度くなる、人世萬事この通りでニコくと笑つてさい居れば喧嘩も起らず不平も起らぬ、怒の矢を發つて來ても笑ひの楯で防ぐ、これ程強い武器はない、この武器を持つ人は圓滿和樂し、この武器を持たぬ人は年中苦情の絶間がない、頭を打かれた上に損をしてお負けに瘤が出来て病院の厄介となる、笑の顔はこれ等の災を防ぐのみならず借金取も柔順しく歸る効能あり。



舟を上げる山

借金株式會社

兩後の苟の如く毎日發生する借金株式會社は發起人に於て始めより産業の發達を圖る目的にあらざして會社を味出しにして已れらが甘き汁を吸はんが爲なり素より目的か目的故株主に好利益を與ふる筈なく利益あれば皆會社の役員の内にて分取りするを以て常となす頃日會社員に體罰を附する法律の發布は其消息を説明したるものなり斯る理由の會社にありては爲す處の事は極く少く採る處の人員はウジ蟲程机に羅列す近頃政府の役人の多き亦此傾きあり斯くして會社は遂にぼろを出して爰に至りて重役の辭職となりて終るを常となす此時船大山の頂迄昇りたる跡なり



墮 落

河童は水泳の達者である此達者物が時より河流れをすする事があるそろうじや木鼠の樹から墮ちるも此道理である猿に至りては變身自在樹上生活者の王様である此王様が時折樹上より墮落するとは不注意も亦極點に達したものである人間は形に於て猿に似て居る形ばかりでなくて技術に於ても猿の様である水練者が多く水死を致し醫師が不養生を致し僧侶が地獄を買ひ政治家が盗みをなし法官が悪事を働き神官が馬肉を喰ふ皆己れの本分を守らざるに出づ斯様な人間は終りには己れの立場より墮落して非業の運命を爲すに至る愚かなるものは單り猿のみならんや



盆を戴きて 天を望む

目 目

よしの莖から天上をのそけばよしの穴だけ見ゆる聞見のせまき人を比論して餘りあり葦は小さながら小穴あれと盆には少も穴がない少も穴のない盆を頭に載せては少も上方を見る事が出来ない向上的の盲目者である永久同じ處の盆の面を見るのみである斯る人の知識は決して發達することが出来ぬ吾人が心低に邪心と云ふ障壁を築きて置き萬卷の書を読むと雖も決して人物になれる道がない人物にならんと欲せば先づ第一に障壁を除き然して後に一卷の書を読みは澤山である近頃文部省の教育は之を轉倒して教育して居るとても日本に人物の出づる目的がない



孫
のばす
おあやさん。

不孝者の源因

子よりも孫の方が可愛いと云ふことがある、孫の可愛いのは矢張り子が可愛いからで、孫が幼いからそれだけ可愛さが増すのである、早く大きくなるやうにくくと自分の年の寄るのも打忘れて引延すやうにするのは人情のさもあるべき處で、引延すといつて何も飴細工ではなし團子細工ではなし掌や指先で圓めたり延したりする譯には行かぬ、矢張り一日に三度の飯を食はして寝かして起して病氣の起らぬやうに怪我せぬやうにいろくの面倒を見てやらねばならないから、到底他人に出来る譯のものでない、其他人に出来ない處を好んですると云ふのは則ち親身の情である、それを飴細工のやう造作なく大きくなつたやうに思つて居る者が多いから、不孝者が出来るのであるから、罰の當らない内に早く、人間は飴細工で大きくなるものでないと云ふことを考へて貰ひたい。



驢馬に
騎りて
驢馬を
求む

馬馬を需む

驢馬に騎りて驢馬を求む、誰か其愚を笑はざらん、然して又驢馬以上の馬鹿があるが誰も笑はない、暴を以て暴に代へ、狂を以て狂に代へ、悪を以て悪に代へ、改良々々又改良、改正々々又改正、幾度改良しても改正しても同じ事が多い、驢馬を捨て、駿馬を求めんと欲せば騎手其人が技量がなくてはならぬ、然るに自己の技量が分らずに無暗に駿馬に乗らんと欲せば、所謂生兵法は大負傷の原因で、寧ろ驢馬に乗つて居る方が、相當で安全である、かゝる輩は宜しく寝小便垂れを逐ひ出して寝糞垂れを求めぬ用心が必要であらう



草季
泳

年のくれ

ぶしよりもの、節旬働きと云ふ俚言あり年から年中安閑として遊逸に流れる奴は人の着飾りして遊ぶ處を見れば急に巳のが仕事の後れ居るに氣付きて急に働き出すと云ふ年中遊び暮して年末に至り掛取りの請求に遇ひて氣が付きたればとて金儲けの時間はない此時に當り平素の典物は期限の爲め最早流亡するに至る之を救ひ出さんとするも如何せん年末の請求書に身をまとわれて遂に沈死するに至る斯る惨たる境遇を好まざる人は平素一月より心懸けて働き置くの優れるに之かず



殿 堂

眼如電爛々たり髻サンサン漆よりも黒く、赤鬼青鬼角を圓め
 御氣嫌を伺ふ是を地獄の閻魔大王となす、夫れ、赤鬼の役は娑
 婆より落ち來るもの共を炎々たる熱鍋に投じ又は峨々たる針の
 山においやるを以て彼の能事終へりとす、而して閻魔君は如何
 に君は男女美醜の別なく、娑婆在世中の行事をたすを以て役
 目大事に机を換へ日に日にその數幾許なるを知らず君の役目又
 難い哉、然れども君忙中有閑時々美人を夢みて恍惚神を浮世に
 飛ばす事屢々なり、此の時こそ赤鬼青鬼輩の所謂洗濯どき也即
 ち君のよだれを忝ふして以て命の洗濯をなす大王たるもの亦大
 に見上げたる者なる哉



聖 經

是故に凡て我この言を聽て行ふ者を盤の上に家を建たる智人に譬へん、雨ふり大水いで風ふきて其家を撞ども倒ることなし是盤を基礎と爲たれば也、凡て我この言を聽て行はざる者を沙の上に家を建たる愚なる人に譬へん、雨ふり大水いで風ふきて其家を撞ば終には倒てその傾覆大なり。

(馬太傳第七章)



馬鹿な政治家

世に法螺貝なるものあり、別に何の智慧あるに
 あらずたゞ一の貝殻を天にも地にも替へがたき
 金城鐵壁の住居となし、傲然として曰く「たとひ
 如何なる強敵襲來すると雖も、よもや此堅固、無
 比の我家を壊すこと能はざらん」と乃ち戸を閉
 ぢ枕を高くして時々鼾聲雷の如し、やがて眼覺
 め戸を開けば、コ Hanson 如何にくゝ何時の間に
 やら漁夫の手に獲へられて市に賣られ居らんと
 は、法螺貝の驚愕狼狽眞に隣むに堪へたり、記し
 て世の法螺先生の右座と銘となさんとす



何んて間がいーんでしよう

恐るく、廂髪に問ふ、汝、廂髪は何故に流行して来たかと云ふと、昔の女は内にばかり居て何處いも出張らぬから鬚も横へ出張らなかつたが、之に反して今の女は何處へも出張るから従て鬚も前に出張るやうになつたので、これによつて時代精神が表現れて居る廂髪に結ふ時は第一に小雨をよける、第二にはおてこを隠す第三に他人と顔と顔と衝突した時に先づ廂髪から先に打付かるから鼻柱が安全である、



己に歸る

天に向ふて唾吐く者は己が面に落つるに非ずや、
 天に背く者は天に罰せられ、天を譏る者は人の
 笑を受く、これ三尺の童子も猶よく知る處なり、
 而して堂々たる名士政客にして天理に背き國憲
 を侮辱して自ら禍を招くを知らざる者あり、何
 を以てか其職を全うすべき、見よ彼等は皆自ら
 其面に唾吐て汚名を残す者に非ずや。



大 乘

忽然として肉塊を現出す、頂くて黒き長き毛を以てし皮膚光澤ありて且滑かなり、世人是を目して女人と謂ふ、佛陀是を見て壇獨山に入る、達摩是を見て色即是空柳は緑り花は紅なひと平然たり一休君は一切衆迷此門を賛す世人是を奥様、夫人、嬖妓、娼妓、娘、と解す、遂にその色を見て煩惱の犬追ひとも去らず意馬心猿狂いに狂い家屋を破り、財を散す、是れ皆解する人の心による歟。

凡人は美人を見て出齒を感じ聖者は大乘を感じ

佛の曰く「煩惱の犬は逐へども去らず」善提の鹿は招けども来らず」と又曰く「意馬心猿」と此等は皆凡夫の煩惱を住家としてゐるくの悪戯をなす者にして「見るに煩惱」とはこの悪戯者が美人などを見て暴れ出すなり、この暴れ者を既に頭の中より逐ひ出したる者を聖人と云ひ佛陀と唱へて尊敬す、其未だ逐ひ出し得ざる者を凡夫と呼んで卑しむ、其聖者と雖も久米仙などの如きは既に美人を見て雲を踏外して通力を失ひし位なれば、まして凡夫は下駄を踏外して轉覆り意馬心猿は狂ひに狂ひ、精神上の大負傷をなして苦痛を受く佛これを憐み給ひ大乘を説て諸人を濟度し給ふと爾云ふ馬云ふ、

梯子の上には虎にや



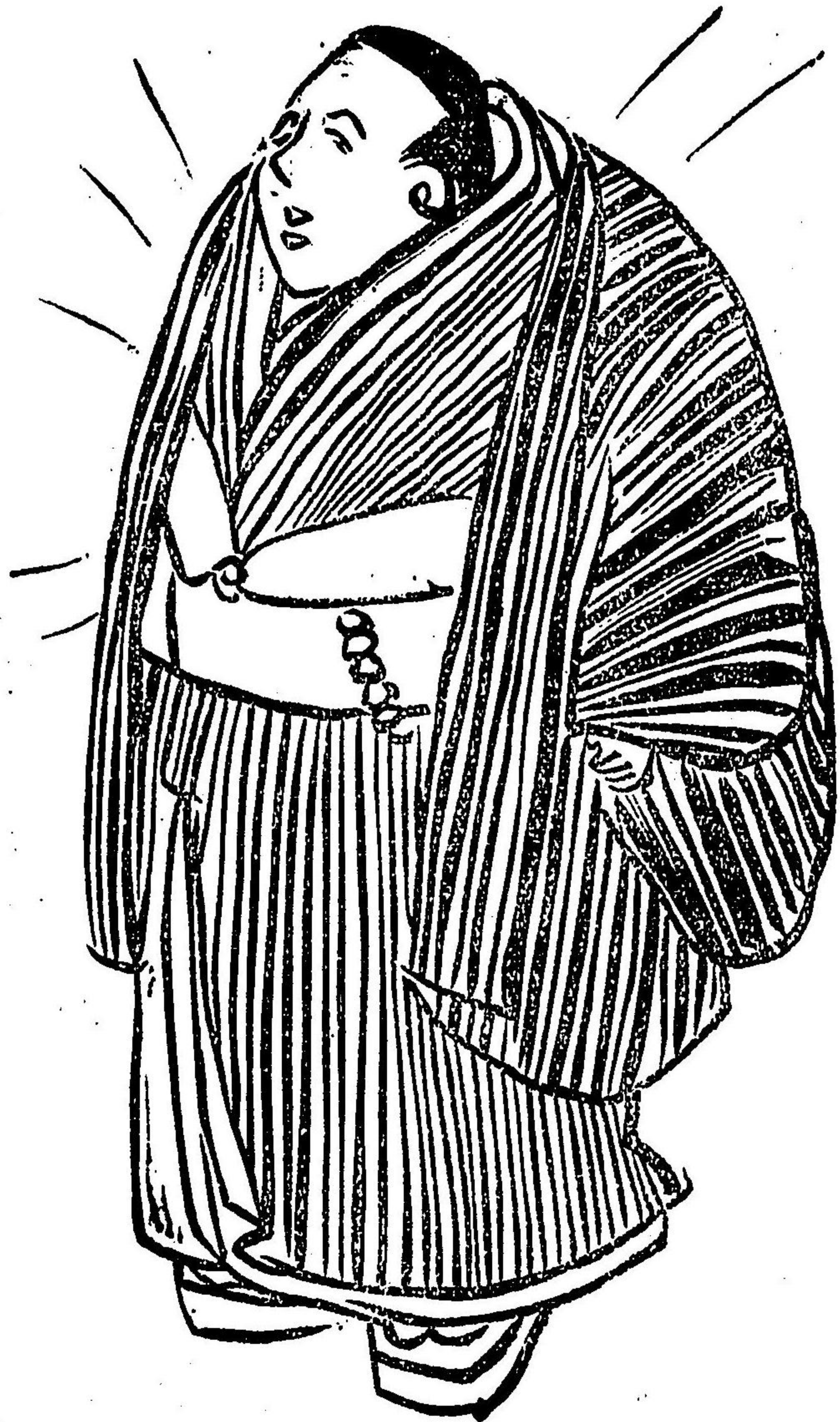
酒に呑まゐる

一杯目には人酒を呑み、二杯目には酒人を呑み、三杯目には人酒に呑まると、一合呑めば二合呑みたくなり、二合呑めば三合呑みたくなり三合呑めば又五合となり一升となり二升となり三升となる、揚句の果は酔拂つて人に引かゝり突かゝり亂暴をなすこと暴虎の如く之を梯子酒と云つて最も迷惑な代物である、近頃、世の中に虚榮に酔ふた梯子酒や拜金に酔ふた梯子酒や我利々々に酔ふた梯子酒や其外いろくの熱に酔ふた梯子酒の先生が續々と出来て来て暴れ廻るのは實に虎を放つよりも危険なものである、この虎の征伐は一日も早くせざればそれ丈け害を殘すことが甚しいのである。



馬鹿の教師

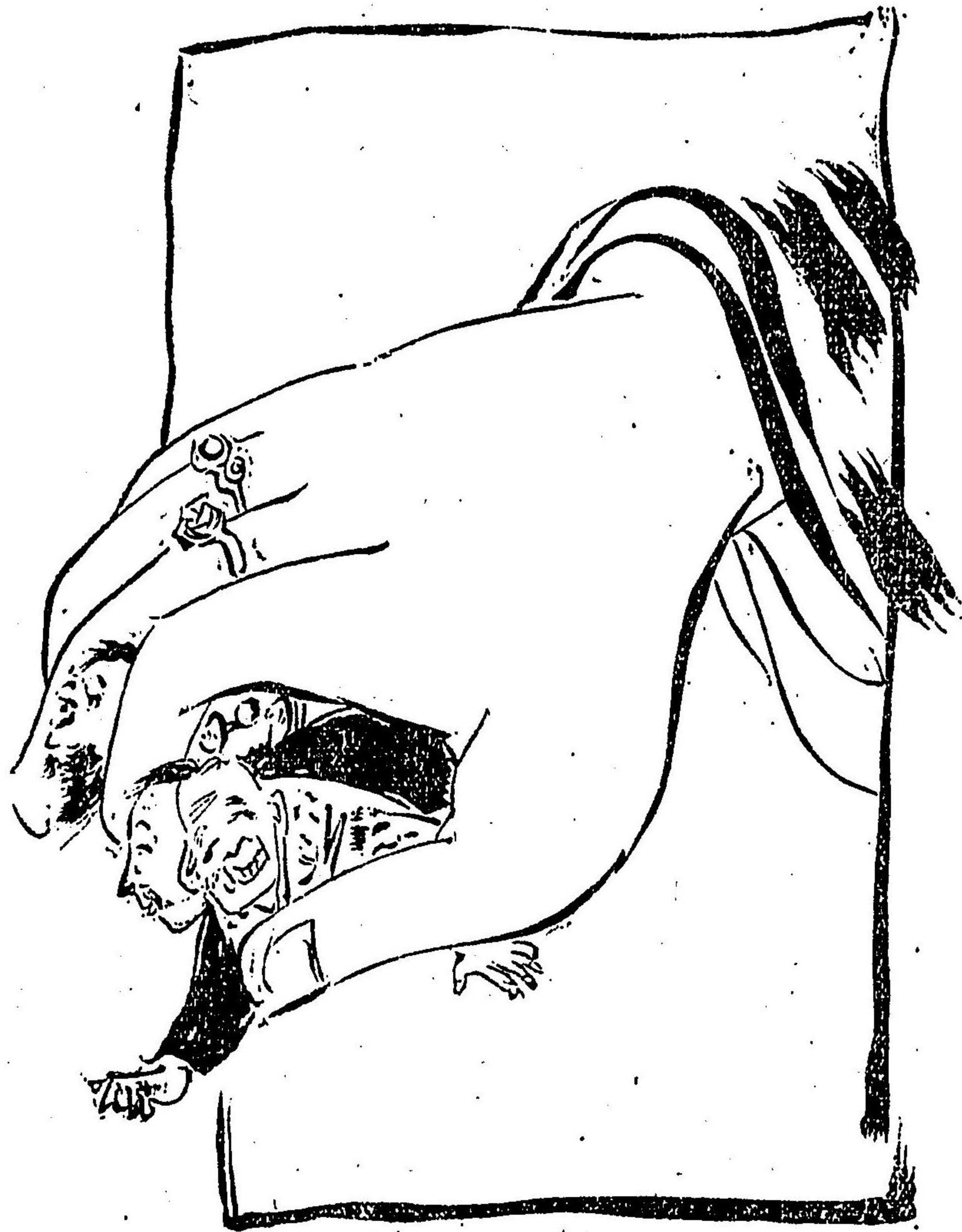
つらく案じ奉るに目尻下りて眉毛は八の字の如く鼻下長く、
 色蒼白く、涎をたらし、ハイカラ頭に、金縁目鏡、鼻髯長さを
 馬鹿旦那の八相とす、中にも鼻の下長さと、鼻髯長さを以て最
 大要件となす、鼻の下長ければ長さほど、鼻髯が多ければ多き
 程益々馬鹿旦那の價値を發揮す、故に美人をしてオヤと驚かし
 むるには、宜しく鼻の下を三位尺に引伸し鼻髯を千本位生すこ
 とを夢めく忘るべからず。穴賢々々



人か衣物か

馬糞を縮緬の袱紗に包みたりとて品のよきものにあらず衣物を着ることに浮身をやつせずしてもよきに非ずや、現社會の如くや、もすればあの人にはたらき者じや常に絹物を着てと云ふを常に互にす、人一たび大道に飛出しそふ眼を八方にくばれば甲も乙も猫も杓子もべらく光る物のみを着てこれ見よがし何とまあ阿房らしい、びらく光らせて御太陽様と光り比べてもする氣かしら今にはちが當て眼がつぶれるぞよ。馬糞君少しは注意し給へ

殺活昏君



空中の財

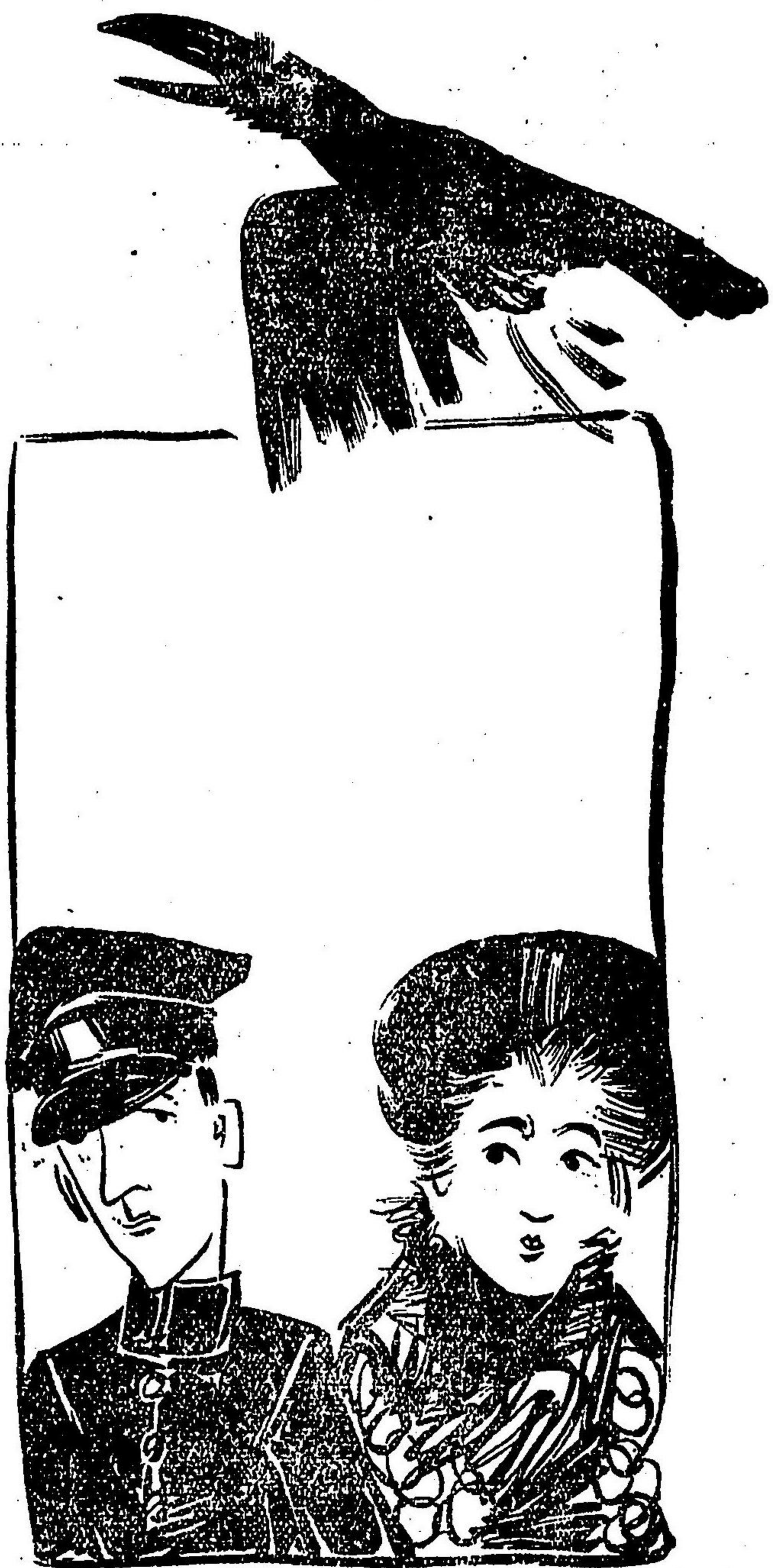
白きこと雪の如く、柔かなること真綿の如く、
 かゝる纖弱き女の手に簪二本も太くては得堪へ
 ぬかと思ひの外、荒くれ男を手の内うちに丸め込ん
 ては放り出し、放り出しては又搦み込み、取か
 へ引替へ金を絞しぼり取ることに、魔術師の如く、人
 の財産を潰つぶすこと玩弄あそぶの如く、男を殺すも生す
 も手加減てかげんにありとはさても恐ろし。



息子に
 目鼻を打つて
 やる親父

耳の製造

學校を卒業すれば、もう天下を取つたやうに逆上せて、自分獨りて育つて來て、自分獨りて豪くなつたやうに心得て居る連中が多いが、それまでにする親爺の苦心はナカク、大底の事でない、苦しい中から學資を送つたり、着物も送れば、交際費も送るのであるから、つまり學士博士と云ふ目鼻も親爺から附けて貰つたのも同然であるから、學士博士となつたとして何も威張るにも及ばぬ事であるが自の力で爲れたと思つて居るのは大間違ひである。



人生哲学



仰天百登

聖は天にあり

鳥の曰く「吾輩は天にありて人間を見ると實に馬鹿の様に見え
て仕方がない、何故と云つて見給へ、吾輩は此様に自由自在に
飛んで居るのに苟も萬物の靈長などと威張つて居る癖にヤレ飛
行機が出来たとか出来ないとか云つて騒いで居るのが可笑しい
アレく彼處に角帽と庇髪の馬鹿者が星だとか蕾だとか云つて
居るのが癪に觸つてならない、エ、糞でもかけてやれ。

俗は地にあり

行かんと欲する所に飛び、止まらんと欲せば一寸と屋根でも木の枝にても憩ふ、呼喚自由なる
哉、吾輩の行動、朝は天日と共にカア／＼と人間共に曉を報じ、夕は夕陽と共に夕暮の趣
を感ぜしむ、呼喚吾輩の行動豈に光明正大にして且詩的ならずや。
人間共を見るに、或は角帽はリボンと喃喃の語を交はしてその中間は世話をやかせ、鼻下長
はヤカン頭に心配をさす杯、見れば實に萬物の靈長も御座の覚める事如斯：ソット近頃
飛行機とやらが出来て吾輩の真似を成すとか、悪口もコノ位で止めになさん。

暗夜の明鳥

敬白

飯 と 口

恐れ多くも萬物の靈長たる人間様が、飯のために年中苦勞を
 して居る、上官の機嫌を取つたり、客に御世辭を云つたり頭を下
 げたり飛んだり跳たりして居る、學士になるのも、醫者になる
 のも官吏になるのも、皆この飯の種を得んが爲めに孜々として
 働くので、この飯が糞となるばかりでなく糞となつても草木を
 養ふのであるから、人間たるものは造糞機械で一生を終るのも
 甚だ面白くない、糞となつても何かの役に立つて貰ひたいが、
 九分九厘迄は飯を食つて屁を放れたり、糞をするばかりである
 から飯が慷慨の涙を流して居るだらう

頭のかたい

親父



頑 固

物には堅いのと軟かいのとがある如く、人間の頭にも堅いのと軟かいのとがある、軟かなるものを豆腐頭と云い堅い物を石臼頭と云つて尊敬するが、石にも又堅いのと軟かいのとがあるとは油断のならぬ世の中である、昔の正義道徳で固めた頭は壊れなかつたが、今の正義道徳で固めた石臼頭は堅そりても墮落して壊れやすい、これに反して舊弊頑固で固めた石臼頭は今でもナカク挺でも壊れぬそりな、そして舊弊の石臼頭ばかりは依然として減らないが、其時の石臼頭は段々に減つてしまつて、今の世の中は豆腐頭の間人ばかりになつてしまつた、



若 紳 士

グレートは大學より出でず金満家の子弟に成績のよき學生なし
 都下牛肉屋の二階に、放吟高酔する様な學生に學業を終へたる
 ものなし爰に至りて親父のすねかぢり博士なる學位は社會に發
 表せらるすねをかぢる既に最愛の親より受くるすら劣等の肉な
 りこんな薄志の人間が社會の上肉を食する様な力量家に到らん
 や今の若紳士とは皆此連中のことなり



頭 の 尻 の あ の らぬ

怪物

世に兩頭の蛇あり互ひに前に進まんと欲していつも居る處は全一地位にありと云ふ之とは類を異にして似て非なる頭のある處と尻のある處とわからぬ人あり斯様な怪物を人間だと思ふて交際するときは臍をかむも及ばざる程後悔ある事を覺悟すべし世の中立派とか獨立とか不變不倒とかの看板を賣る處に斯る怪物の多きものなれば注意を忘るべからず



轉 倒

曰く何々の女學校出身と云ふ肩書を鼻にかけたハイカラ夫人がある、虚榮に走つて家庭を忘れ子を忘れ、夫を忘れて浮身を飾つて何々婦人會とか宴會へ毎日出かけるこんな細君を以つた人は良い迷惑で子供の世話から掃除から飯炊までせねばならぬ、其上女權がどうかこうとか聞かせられるのには恐縮である、現今のやうに女が段々増長して來るのに引かへて男が段々意氣地なくなつて來るやうでは將來は兵隊も女にせねばなるまい、



山も
張る

紙製の富士山

良賈は深く收めて空しきが如く——君子は盛徳ありて様姿は愚なるが如しと古聖は云へり今の人には之に反して紳商は自動車に乗りて虚をテラヒ學者は學位を買ひ求めて待合に高酔すと云風俗が一般の人氣なり夫れ故商人は高利の金をかりて紙張の富士山を拵へ學者はヒゲを貯へてテランプに満足す社會が之を許し自身にも亦之を得意がる實に輕薄窮まる世の中となれり今日は誠實や堅固などは愚鈍家として社會一般より排却せらる



長面、
穴をあける
番頭

鍵は盗人の手にあり

帳面へ大トネルをあける不埒な番頭がある、其費い込の穴は到底埋めることが出来ない、終ひには露見してお拂箱となる、中には罪人となるものもある、其罪や憎むべしと雖も、商店の番頭位はまだまだ罪の大きくないもので、會社の番頭、銀行の番頭、團體の番頭で大穴をあけて居るものがある、それで御拂ひ箱にもならぬば遠慮もせず馬車や自動車に乗廻つて威張つて居る、此を咎めぬのみならず世間の者共が余り尊拜するから彼等は益々増長するのである、大々的制裁を加へぬばならぬ。



時計はあり
とぬりする盗人

月 給 屋

昔の月給取りは仕事の擧がらざるを心配し今の月給取りは時間の経過の遅きを心配す昔は己が責任の擧がらざるを以て大なる恥辱となし今は不正の金員のごまかし場所を捜す斯様なる魂情を以て毎日勤むるを以て月給屋の事務の擧がらざると御話しにならず世は次第次第に末になりて毎日朝から晩迄只時計の針の動くをながむるのみ



は目玉と
思ふ

電 火

坐頭の息子はありもせぬ親父の目玉を盗み商家のデツチは主人の目のなき場所を捜し官吏は長官と共に目玉の交換をなしどれもくも光る目玉を好まざる事御話にならず此風潮の間に生長する悪黨連も一度び電光石火嚴々君に發見せらるゝ事あるときは眼光火を發して鐵拳と共に飛び來り悪黨連も面も擧ぐるに處なく低身平頭只其御目玉を口先に請取がる如く見せかくるのみ斯るもの如何てか改心に向ふべきぞ親父の後姿を見るより直様又々元ののらくらに歸り來るそあさましけれ

目の長い親父



外を見る目

今は千里眼なるものありて天體の奥迄も透視する時代電話に無線電信ありて之を補助すれば如何様なる暗き處と雖も目前に露出せられて親父の前に知れざる事なし之に加ふるに長き目を以て見回すに於ておやこんな親父の配下にある働き人は悪事を爲す事は出来そうもない筈であるが餘り目が大いから此目の裏の當りて少々眼光の屈かざる處あり此場所だけは暗中の光明として折々骨やすめをするそうじや不思議の事には此親父人を見る眼光は仲々であるが已れを見るの目は更になく自身の醜體には少も氣付かざるそうしや

腕を磨く人



腕を磨く法

世の中に齒を磨く人と、顔を磨く人と、頭を磨く人とあるが、それは磨いたとて御光がさす譯でもなく、譽られるでもない、腕前を磨いて置くのが肝心じや、腕前を磨くには石鹼や糠では駄目である、心のターシを以て苦勞の水で洗ひ上ねばならぬ、垢切や玉と光を競へる身

聖經に曰く

患難は忍耐を生し忍耐は練達を生じ練達は希望を生し希望は恥羞を來らせざる事を知ると



神の心

假令われ諸の人の背および天使の言を語るとも若し愛なくば鳴銅や響鐘の如し、假令われ預言するの能あり又すべての
 典義と諸の學術に達し又山を移すほどなる諸の信仰ありと雖も若し愛なくば數るに足ぬものなり、假令われ我すべての所有を
 施し又貧るゝ爲に我が身を予るとも若し愛なくば我に益なし、愛は寛忍をなし又人の益を圖るなり愛は嫉ます誇らず傲驕らず
 非禮を行はず、己の利を求めず輕々しく怒らず人の惡を念はず、不義を喜ばず眞理を喜び、凡そ事包容ほよそ事信じ凡そ事
 望み凡そ事忍なり、愛は永久も離ることなし然と預言は廢り方言は忌知識も亦廢らん、我儕の知識全からず預言も全からず、
 全き者きたるときは全からざる者廢るべし、われ童子の時は語るところ童子の如く謙るところ童子の如く慮るところ童子の如
 くなりしが成人て童子の事を棄たり、われら今鏡をもて見ごとく見ところ昔然なり然と彼の時には面を對せて相見ん我いま知
 こと全からず然と彼の時には我が知るゝ如く我しらん、その信仰と望と愛と此三の者は常に在なり此うち尤も大なる者は愛な
 り。

(書林多訂書第十三頁)



持来金の令嬢

生活の奥義

婿入又は持參金付の嫁を貰つた人のために婿大明神の祭り方を御傳授申すべし、

- 一 何事も婿大明神の仰せに従ふべし、
 - 一 婿大明神を主人の如く敬ふべし、
 - 一 婿大明神の氣嫌を損ふべからず、
 - 一 女尊男卑主義を守るべき事、
 - 一 婿大明神の尻の下に敷れても不服を云ふまじき事、
 - 一 浮氣を嚴重に慎むべき事、
 - 一 遊女其他の女に近くべからず、
- 右の條々を心得實行せば婿殿の無事安穩を保証致すべし。



藪 入

毎月發行の旅行案内には出て居らぬがこの船は藪入丸と名けて
 普通盆と正月と則ち年に二度の發着で殊に出發二三日前には夜
 もろくく眠られず愈々明日と云ふ晩には枕元に下駄と荷物を
 ならべて寝る位であるから、翌日は満員々々又満員と云ふ盛況
 を呈し、其速力は則ち歸心矢の如くであるから汽車も飛行機も
 及ばぬ程獨特の世界無比の速力である。



現今の紳士

シルクハットを冠り、ハイカラパイプを口にし、言ふ處もハイカラにして且紳士的なり。現今此の人種が年々歳々雨後の竹の子の如く繁殖す、嗚呼國家の爲め大に賀すべきことならずや、窃にその行動をうかがうに、その食ふ處の者は、織片あり、鉄あり、砂利あり、甚しきは常に人間を常食とす。社會は之れを目して紳士と云ふ、紳士なる者豈なかくの怪物ならずや。



文化のおこり

二十世紀の世界文明とは何ぞや、曰く陸には精兵雲の如く、海には堅艦林の如く、天に飛行機あり地に地雷火あり水雷、巨砲、發明又發明、人を殺戮する機械の完備せるを云ふ、又曰く所謂文明國とは他を屈伏威嚇して強國と叫ぶものを云ふと、果して然らば未開の蠻人が人の首を切つて名譽となし、首符を催し、骸骨をならべて誇りとなすものと何の差別かあらん、宜しく骸骨を飾つて文明國の大禮服と爲すべきである。



管ヤ季子の流行感目

風 邪

風邪は萬病の原因、恐るべきは風邪、要心すべきはカゼ……否
 カリである、是を借金風邪と云ふ、借金風邪はお多福風邪、お
 染風邪などよりもつとく癒りがたいものである、其妙薬は黃
 金水 儉約散を用ふれば立處に癒るが、黄金水はなし、良薬の
 儉約散は苦いくと云つて服用を怠つて居ると、しまいには大
 病人になつてしまふ

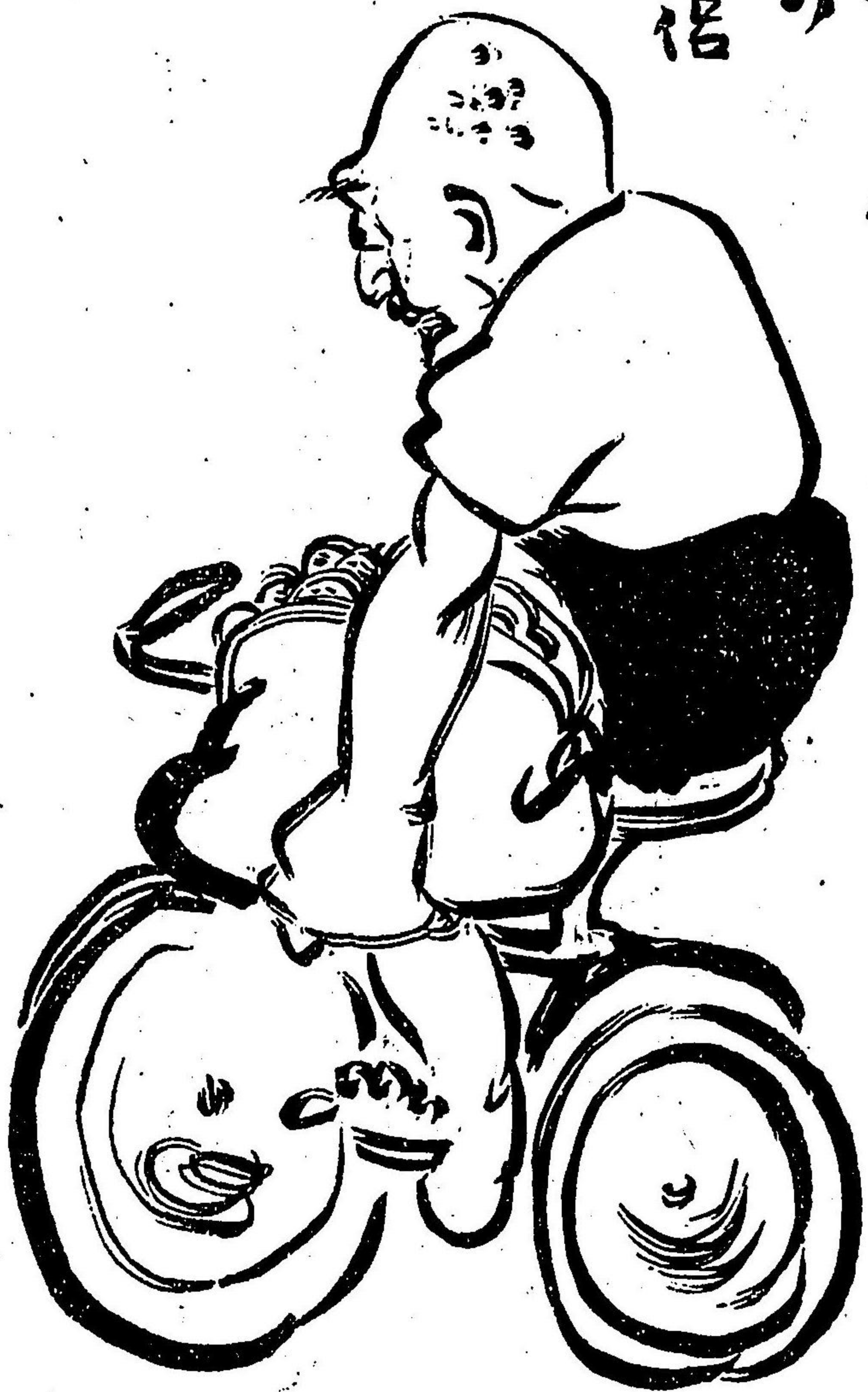


腹の安賣

昔の遊女は身は賣つても心まで賣らぬと云つたそりな、處が今日の人には段々冷憐になつて來て堂々たる紳士が金のために、節操を賣るやうになつた、其價も最初は高かつたが段々下落して二束三文とまでは行かずとも競賣に附するは近き將來ならん其賣買の方法は他の商品と異なる点を揚ぐれば左の如し

- 購賣と云はずして買収と云ふ、
- 符牒を見ずして腐腸を見て賣買す、
- 口髻を生して議員などの肩書なければ賣行惡し、

今の僧侶
金を作るいろいろが、



院號の賣却

地獄極樂への沙汰も金次第、布施の無い經は讀むものでなし、
とこんな有難い坊さんは自轉車に乗つて高利貸を營むとはさて
もく恐縮千萬である、

煩惱の自づと廻る火の車

地獄へ急ぐ、僧ぞいそがしき

ふり立てる頭に角はなけれども

心の鬼や角を生さん、



經世哲學

諺ことわざに曰いく虚偽こゝろから出でた誠まことは宜よろしけれど誠まことから出でた詐いつはり
 は禁物かぎものなりと灰吹はいふきから蛇へびの飛とひ出ですはおうく正實ただごと
 の事實じじつをゴマカスより出でつる怪物かいぶつなり世よを誤あやり人生じんじふ
 をきづ、け國家こくが大乱だいらんの基もとは皆みな此こゝろ兩道りやうだうつかる別わかけの分ぶん
 岐ちがより出でつ社交經世しゃうかうけいせいの奧義おくぎはこんな物ものならんか



人さしをば使ふは夫人

惡 風 隱 勢

歐米の交際社會はバリー出來のマイヤをヒカク光らせばらの香水に身を香はしおせじたらくはね回り矯を賣り詐言を廻し男子を支役する犬猿の如くならしむる事然りとす此惡風俗は歐州の大欠点として現今識者の中に氣付かれたる今日此頃日本の馬鹿紳士の妻女どもが此惡風を社會にふりまき始め婦道を愈々破壊し居れり斯る惡風は男子が矯正するこそ順序なるに堂々たる人間か尾をふり頭を垂れ犬の如く此毒婦の前に命を伺ふものあり嘔吐三斗オーきたない





人の禪で角力を
とるに人

畫 百 天 仰

三 聖

言はざる、見ざる、聞ざるの三猿は吾之を庚申塚に於て見る、而して佛の誠の尊く有難きに感伏した然るに人間の三猿は、権力者或は金力者を本尊として盲従する者、沈黙する者、正義の言を聞かざる者とす此猿は天下に横行し、良民を害すること甚し速に之を退治する良機を發明せられんことを望む。

皆 貧

禪を^{ぜん}買^かう金^{かね}がないとは餘程^{よほど}の貪^{ひん}乏^{ぼう}なり此^{この}境遇^{きやうぐう}にありても自^じ分^{ぶん}の
 道^{だう}樂^{らく}は禁^{きん}じ難^{がた}く人^{ひと}の品^{しや}物^{ぶつ}をかりても道^{だう}樂^{らく}したくなる道^{だう}樂^{らく}と云^いふ
 ものは恐^{おそ}ろしきものなり此^{この}恐^{おそ}ろしき風^{ふう}潮^{うしほ}は只^{ただ}今^{いま}は普^ふ通^{つう}の營^{えい}業^{ぎやう}上^{じやう}
 にも用^{もち}られ澤^{たく}山^{さん}ある商^{しやう}人^{にん}の内^{うち}でも皆^{みな}人^{ひと}の金^{かね}で商^あひ^まをする金^{かね}持^ぢと
 うはさせらるゝ三^{さん}井^いさへも人^{ひと}の金^{かね}で商^あひ^まをする又^{また}之^{これ}のみならず知^ち
 識^しも人^{ひと}の知^ち識^しをかり試^し験^{けん}の答^た案^{あん}も人^{ひと}の答^たを^を盗^{ぬす}み信^{しん}望^{ぼう}も他^た人^{にん}の名^な
 義^ぎにて仕^し事^じをなす自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}獨^{どく}立^{りつ}して業^{ぎやう}務^むに就^つて居^ゐるものは只^{ただ}滑^{ころ}
 稽^{けい}社^{しゃ}の空^{くう}助^{すけ}一^{いっ}人^{にん}のみである



筆一本

口車に乗る人



畫 百 天 仰

筆 一 本

筆は劔よりも活殺自在力を有す一本の筆は天地間の萬象を叙し喜怒悲樂を述べ人を泣かし人を笑はしむ、筆の先で費ひ込の穴を胡魔化しもすれば、卓勵風發正々堂々の議論を戦はす事もある、一枝の筆先で免の字を與へて首を跳ね飛ばすに至りては劔と異なる處はないしかし無學文盲先生の手にあつては此大利器も徒らに蚯蚓の行列か折針を製造するに止るのだ世の中の物は凡て活用するとせざるとは使ふ人の如何によるものである、只今の筆は皆破壊的に向ひて走るとの事是れ何の原因ぞや

危険々々

此車は製造所もなければ、通行税も要らぬ。しかし危険なことは此上なして、うかくするとどんな谷底へ轉び落されるか知れるものでない、しかし此車は段々盛に流行をして来て何時の間に乗せられたか分らないから世の中を歩く人は要心に要心をせねばならない、此頃多くのテンブラが毎日此車に乗りて大威張りて大道を闊歩するを見る此位おもしろい事はない



信誼地に墮つ

變節と云ふ新橋字顯われて以來官吏にも議員にも節を破る奴相
 生し政治的行動の危険なる事云ふも更なり鳩山などは其大將株
 だと云ふ話なり此風は次第に下に及びて只信用のみを以て經營
 する商人社會にも繁殖し只已れさへ都合宜しくば他人は明日死
 すると雖も痛さを更に感ぜず金と美人は獨り旅とやらにて約束
 事など守るべくもあらず此成り行にておし進めば毎年輸入超過
 一億萬圓宛は期して保險する事を得べし

使ひニリくと

あした

はく

小僧

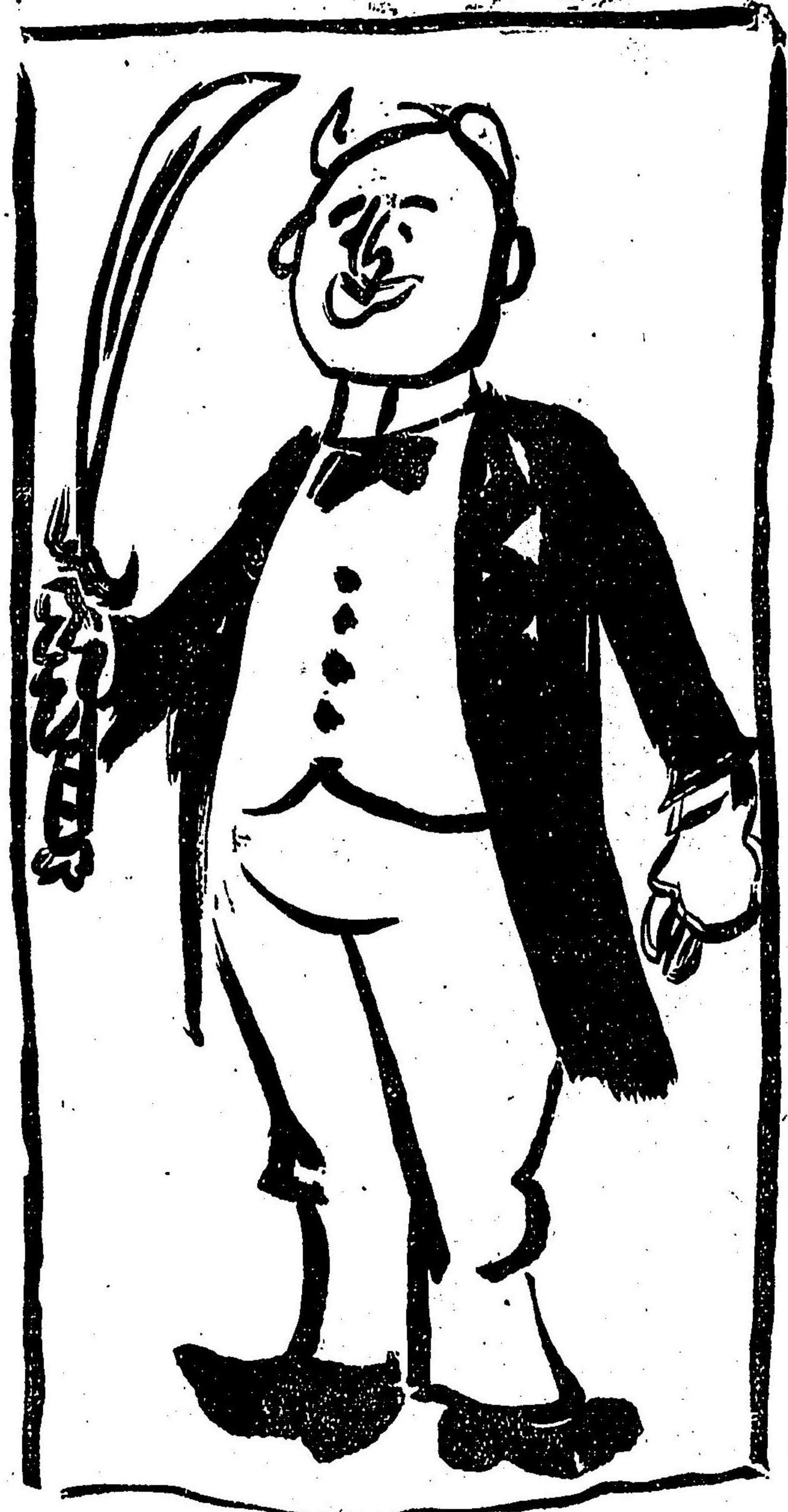


小僧と土藏

ベストは人の生命を奪ふ白鼠は商店の帳簿をこまかす小僧に至りては只下駄をはくのみ也此下駄も不正の餘金にて買ひたれば小僧等の下駄をはくのはなぜ無理か

足かあるから下駄もはくなり

斯様な風俗と相成只今は女中より召使より小僧に至る迄一般に晴天でも下駄をはき申候由此風潮に乗じ只今は都會には小僧買出しと云ふ新案流行致し或る商店の品物を盗まんとせば其家の小僧を手なづけて盗み出すとの事商店を持つ主人公は御注意可然と存候小僧と雖も土藏を破る案内者たればなり



米人排日の圖

片手に劍を持ち、片手に握手、是れを不動の利劍と見るは誰ぞ、是れを人道破懷の本尊様と解するは誰ぞや、不動の利劍は東洋の精華日本魂なり、人道破懷の本尊は謂はずもかな某國主義惡米利加魂なり不動の利劍には俠義あり、博愛あり、人道あり、乞ふ亞米利加魂の存する所を判ぜよ、

文明とは野蠻の稱號

博愛を口にして鬻行を恣にし、片手に劍を持ちて片手に握手をなす、これを亞米利加魂と云ふ、亞米利加魂は自己に勝手なる理窟を唱へて他に無禮を加へ、人道を没却して猶正義と叫ぶ、之を己を捨て、他を救ふ東洋の博愛とは月と泥龜の相違なり、我國は土地小、人民少しと雖も、古來傳來の日本魂あり、忠勇義烈東西に卓越して公明正大日月の如く、血あり涙あり情あり俠あり、正義のある處水火を避けず、弱を扶け強を挫き、以て人道の美を盡す、天若し善を悦ばし神若し惡を憎まば亞米利加魂の繁榮を憤るや必せり。



文明の肉食

婦人の口は至つて小さい口だ米の飯でも横に入らぬ立てなけりやてなことをよく耳にするが二十世紀の婦人は馬の足を食ふそりな、そりや定めて馬辛う

弱肉強食

太古の穴居時代には人間は木の實を食つて居た、それが進歩して麥となり米となり、パンとなり肉となり、餛飩となり、蕎麥となり、蒲焼となり鰻井となり天浮羅となり、改良して西洋料理となり、段々贅澤になつて來て山海の珍味を列ぬ、それでもまだ足らず令夫人は馬の足を食ひ、令嬢は猪食つた報ひの始末に困り、それでもまだ懲りず、賄路を食つて免の字の附く御役人ありとはサテ／＼木の實より外の物を喰つた事なき穴居時代の人間は定めて草葉の陰で仰天して居るならん然るにモーツ弱肉強食と云ふものがある、それはどんな味がするかと云ふに吾人はトンと其食ひ方が分らぬから、奸悪なる富豪や會社重役などに聞いて見るのが好い。



欲 聽

無常を感じても感じなくても美人は美人、醜婦は醜婦、石地藏様と濟し
込んでも美人を見れば、美しい、凡夫の淺ましさを、美人を見れば直に
美人に捕われ、金を見れば金に捕われて終世を過まる、さあその捕われ
ぬようにするが第一じゃ、現今の所謂政治家や實業家のように捕慮にな
つちや人間もおしまいだ、捕慮にならぬ工夫を日々忘れぬよう冀ふ

石 佛

蚊が喰付いても、打かれても一向御構ひのなき石地藏菩薩、この菩薩も時々は參詣する天女の
姿には「佛も元は凡夫なり」と悟り給ふことあらん、ましてこの冷かにして情なきことだけが
石地藏に似て徳もなければ學もなき。當世の政治菩薩、實業菩薩、自ら足を天女の許にはこび
給はん



未來の銅像

人眞似コマネ隣の猫はてんがく焼くとして手を焼いた
……と家の小兒が外で歌つて居時にエライ髭のある
人が来てしきりと銅像設計に苦心をして居るそうし
てその摸形が床に裝飾つてあつた、よくよく見たら
藝妓の立婆さ……おいお起きよくと起されて目を
ふさく起きたら下婢が箒を以て枕頭に仁王立ち





馬鹿連中

魚水にあれば従容たり、人、人たれば亦太平無事、
現社會應々魚陸に上りて藻掻き人間水に飛び込んで
遂に死す、藻掻くものはもがくに任せよ、他人の言
なかく以て耳にするところに非ず、窮鼠却て猫を
囓む的になる乞ふ要路を歩む人に細心以て充分の注
意を願上奉る依一札如件

禮 拜

有名な行誡上人は乞食を見て禮拜したが今の僧は美人を見て合掌三拜甚しきはたこ入道に手拭のたがをかけて躍り出し什寶國寶何のそのわたしや御前の爲めならばたとひ火の中水の底ととんだ喜劇を演じる、罪深きは女人なり、僧ならぬ身の若者が出齒龜をさきめこむ實に世は末ならずや是れそも誰の罪ぞや。

南無阿みだ佛

つらく惟みるに釋迦も達磨もヒヨイ〜と産まるとて女人を拜せる一休僧かたゝしは活佛として尊はれ給ふ大谷光瑩上人様を自由自在にする生き佛の又生き佛を拜せる門跡様か、本願寺の奥の院を開張せば難有き生佛の澤山に出現しますことさら〜疑ひあるべからず



大學の油學生

角帽に金椽眼鏡櫻のステッキ高きカラ下き頭を尙ほ下げて天下の大道を鵜の目鷹の目にてゾロリくと連歩を運ぶは當世の書生さんよ、彼等は何が故に國元より金を取り寄するや而して尙たらずあらゆる悪辣手段を弄してかよわき婦女子より金品を強だつし遂に彼等の金城鉄壁を迄占領せんとす、現今その針に引かゝるもの日々多し國家の爲め豈慨嘆せざるを得んや天網恢々粗にして漏さず必ずその跡をたゞん事期してまつと十六世紀の腕パク書生冥途よりの書留郵便謹んで傳達の勞を取る如斯。餌を以て魚を釣らば之を殺生と云ふ、而して悪辣なる手段を以て蓄へたる金を餌とし奸策を弄して婦女を釣らば之を極悪重罪と云はん、此極悪重罪者は法律の網を免れて天下に跋扈し人の迷惑を願ざるなり、吾人はかゝる極悪重罪者に早く制裁を加えて他の安寧を期せんことを冀ふ



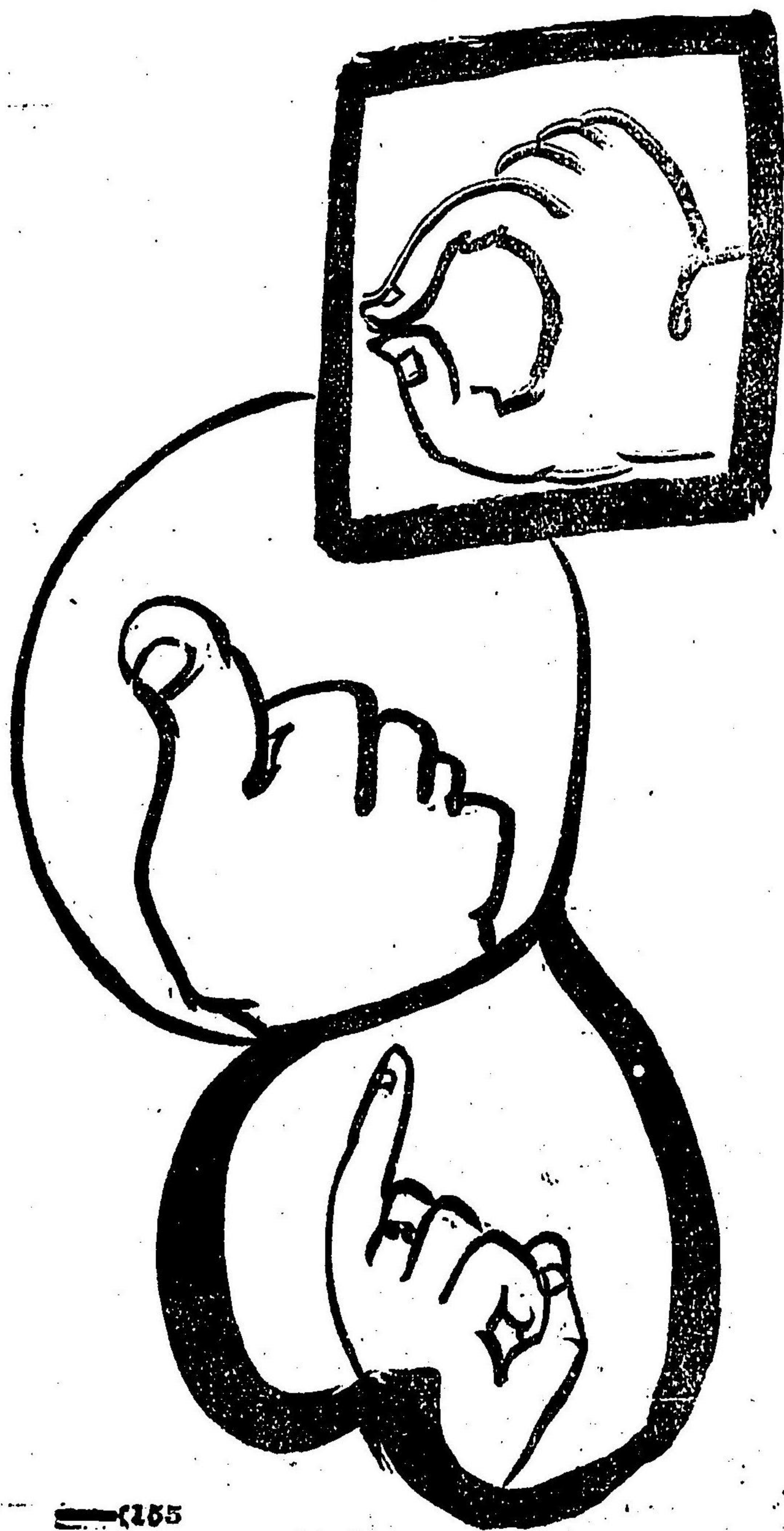
平和の神

世の中に矛盾なる語あり、口に善行を稱して自ら不倫を行ふ是
 お手近の一例なり十九世紀の末に平和の神は西天に羽根を擴げ
 て飛び出して來た、赤髯先生合掌嘆美たゞちに堂を建立し献ず
 るに銃砲、小銃は云はずもがな、軍艦、火薬その美實に盡せり
 致れりだつたそりな、して餘興として以來戦争ゴッコは一切誓
 ふて仕らずてな狂言を催ふした、所がその神の喜び一方ならず
 奉獻の品々を以て歸天と出かけたがあまりに御土産澤山で一先
 づおあづけと奉獻物を置いていつた、そりして諸々の人々に決
 して喧嘩をするなよ、そむくとばつを與へるぞとの御詫宜一同
 頭を下げて謹みく謹聽した神は天に歸つた、そして残りし諸
 々の人々は今に一切作らぬと誓た品々をせつせと造つて自慢を
 して居る今に罰がなければよいがと隣の小兒が心配して居た



帝大入婿學校

小糖三合あれば婿入せずと叫んだ日本男子は太古だそりな、今や何々大
 學の肩書ある先生方は言々太古は非文明なり、未開なり、度すべからず
 と堂々と言に筆に傍若無人の威ばり方、いやはやその鼻威氣のすばらし
 い事側にもよれぬ遠くてさへ汚い、その太古と申さる人には凜たる男子
 的氣骨あつて斷じて入婿をせざるを以て男子の面目玉是れ見よと肩を上
 げて天下を濶歩したが今のお書生様方は寧ろ入婿を無上の光榮として一
 に拜金二に美人三に頭を下げます四に尻にしかれとゞのつまりがやにさ
 がる的人にイヤ文部の當局者も御世話のやける事だるう、今に高等入
 婿専門學校でも建てにや男子が承知すまい穴賢々々



暗示哲學

二指を以て圓形を示す、天文學者は之を月と思ひ、商人は錢なりと考へ、甘黨は餡ころ餅と早合點す。更に親指を出せば官吏は上官と心得て容を正し、小僧は主人と察して居眠を覺す、更に又、小指を出せば息子は莞爾と笑ひ、花嫁は柳眉を逆立てる浮世哲學の眞理この間に存す。



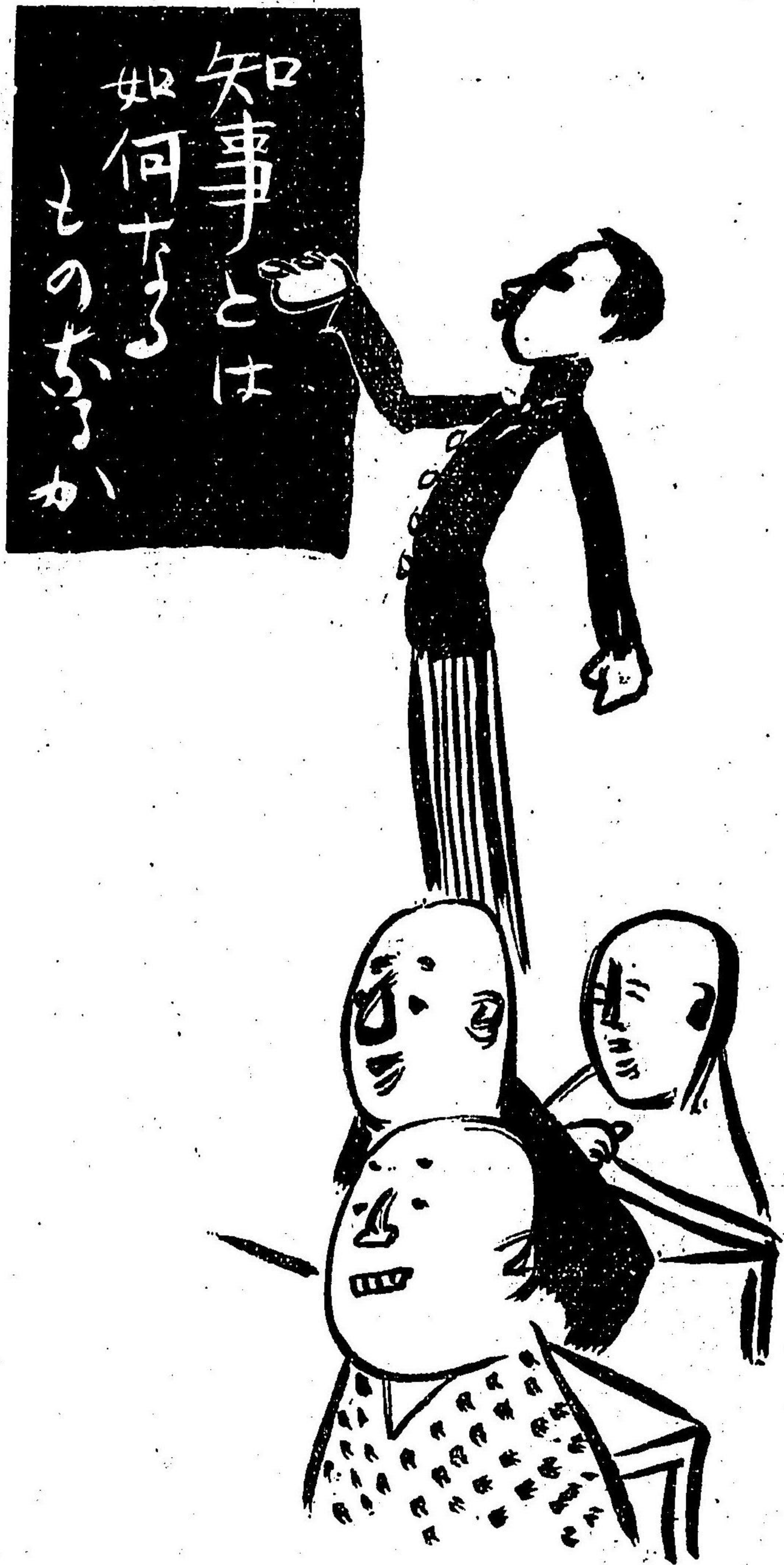
英 人 の 影

影は形に従ひ、形は影を従へると、これ現代の眞理である、大學卒業證書は一富豪の女婿候補者たるの資格を作るに止り、其取捨採否は一に富豪の御機嫌如何によつて決せられ敢て他の干涉を許さず、候補者は其鼻息を伺ひ、只管其意に従い奉り其尻につき其影となつて入選を勉む。



無藝者の行列

世上廣告樂隊の旗持なるものあり、何の藝もなく何の能もなく、たゞ口上云ひの尻につきて市中を練り廻り、人の提灯持をなすこれ有爲の人物の耻づる處、而して又會社、議員の中には之に類する者あり社長、議長の尻につきて提灯を持ち、旗を持つ役をなし、得々然たるものあり、社會は此を議員様、重役殿と崇拜するは、樂隊を見て狂喜する兒童と等しと云ふべし。



知事とは如何なるものなりや

某小學校の先生三年級生徒に向つて「知事とは如何なるものなりや」と質問すると一人が「知事は學校に來りて祝文を読み折詰を食ふ人なり」と答へ他の一人は「知事は鬚を生して威張る人なり」と答へ、又一人は「知事は停車場へ出入して大臣を送り迎へする役人なり」と云つたそりな、しかしこんな知事が無いとも限らぬ



有給の案山子

世に案山子なるものあり、何の技倆、少の智恵あるにあらず其服装はと云へば破れ等破れ衣を着て日中畔の中に立つて無智の鳥禽を威嚇するのみ、然れとも世を害せず人を殺さず有給の案山子に至つては、之と異り世之を元老と稱し、又自ら銅像を建立して人に尊拜せしむ、世人は此世界を案山子の跋扈にまかさんとする乎。





文部の女子教育

尻の重きこと石臼の如く、無精男の如きはチト閉口
なりと雖も、輕きこと風船玉の如き現代婦人を如何
にすべき、虚榮の風に煽られて空際に天蓋も雷なら
ず之を轉ばざらんと欲せば、百千万貫の石を附着せ
しむると雖も未だ保證すべからざるなり。

憂國の士と虚傲家

金殿玉樓に起臥し食ふに山海の珍味を以てし、侍するに絶世の美人を以てす是れ方今所謂御エラキ人の何等かの報酬ならんか又野の一遇に破窓燈火うすぐらき處古人名賢を友とし眞に國家千年の計をチビ筆もて熱血したる蹟を止めつゝある眞個憂國の志士あり、社會は是を目して馬鹿となして詈り社會は前の山海的人物を目して紳士と謂ふその意の何邊に存するや吾人大に解釋に苦まざるを得ざるなり曰く、とかく浮世は馬鹿ばかり石が浮んで木の葉が沈む今の世に、之を覺るもの少もなきか

九
角が
つく



虎に翼

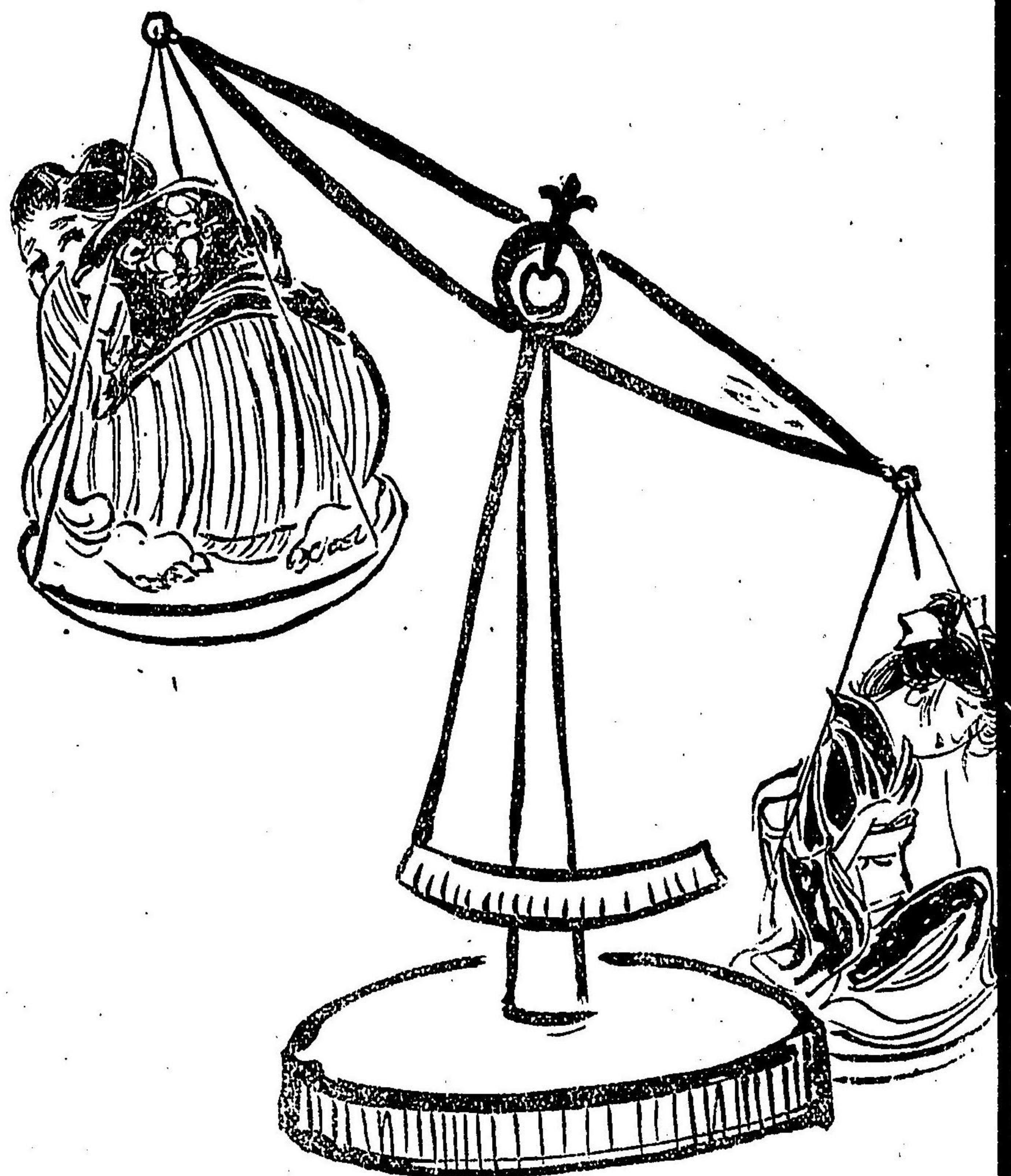


方 圓

丸い物ばかりではコロ／＼と轉けて仕方がない、と云つて又四角な物ばかりでは煉瓦を積んだやうで何の趣味もない、去り乍ら余り心が圓過ぎて坊主のやうでも因る又四角張つて法律家のやうでも面白くない、免角世の中は圓い物と四角な物とかなければならぬ、圓い茶碗に四角な膳が付き四角な碁盤に丸い碁石が付き、圓い灰吹に四角な煙草盆が附いて始めて用をなす、四角な窓から圓い月を眺めてこそ趣がある、と云ふ具合に圓と角を衝突させずに又離さぬやうにせねばならぬ。單に方圓のものばかりでない、疲嶽骨右衛門と云ふやうな男は太つた女を好み梅ヶ谷のやうな大男は反て細い女を好み又蟬螂のやうな女は太つた男を好み、白のやうな女は細い男を好む、造化の神の調合は實に面白いものである。

狂 暴

猛虎の如き勢を以て暴れ出したら如何ともすることが出来ない
 更に又翼を添へて狂い出したらそれこそ大變である、野獸の如
 き狂暴家に權力を與へて保護し、貪慾飽くなきの不徳漢に金力
 を與へて其惡を恣にせしめつゝある現社會これ果して誰の罪ぞ
 人を害ふの猛獸は宜しく檻に入れて置くべきである、それを出
 し放して危険を顧みず、剩さへ翼を添へてやるとは不都合千萬
 である、盜賊、詐欺、賭博、殺人の暴れ者は法律の網を以て狩
 り取れども、この暴れ者以上の慕者を不問にして置くとはそも
 くどう云ふわけか



メートル

輕さうに見えてもナカク、重いのは娘の戀病、
重さうでも軽いのは下女の尻、この比例を以て
推す時は坊主の慾は輕さうで重い、醫者のとて
殺した罪は重罪で人に知れず、息子の遣ひ込は
輕さうで重く、親爺の立腹は重さうで軽い、女
房の嫉妬は輕さうで重く、重さうに見えて軽い
のは亭主の待合遊び、人間万事斯の如くハカリ
知るべからざる者なり。



酒の罪に非らず

酒の匂ひをさくと腹の出が承知せぬなど、云つて貧乏しても畢丸を質に置いても呑みたいく、一生苦勞をする、之を酒狂とも上戸とも云ふ、酒と見れば凝として居ることが出来ず、一生懸命に走り出す、走り出したが最後酔拂つて前後不覺になるのみならず身を忘れ家を忘れて遂には財産を減すに至る、實に憐むべきである、これは酒の罪であるか呑む者の罪であるか、素より酒に罪はない其證據には適當に呑んで居る人は少しも害はない、呑過ぎるから害がありとすれば、害を拵へるのは呑む人の罪である、酒は呑むべし、呑むべからず、賭博をするのは賭博をする人が悪いので賭博の道具が悪いのでない、世の中の事は萬事其通りである。

明治四十四年四月十五日印刷
明治四十四年四月十九日發行

定價三拾錢

編纂者 大月 隆
發行所 東京市牛込區市谷加地

印刷者 青木 弘
東京市牛込區市谷加地

印刷所 株式會社秀英舎工場
東京市牛込區市谷加地

發兌元 東京市神田區錦町一丁目十六番地 東京滑稽社



最新版

拳骨百話

定價 參拾錢
郵稅 六錢

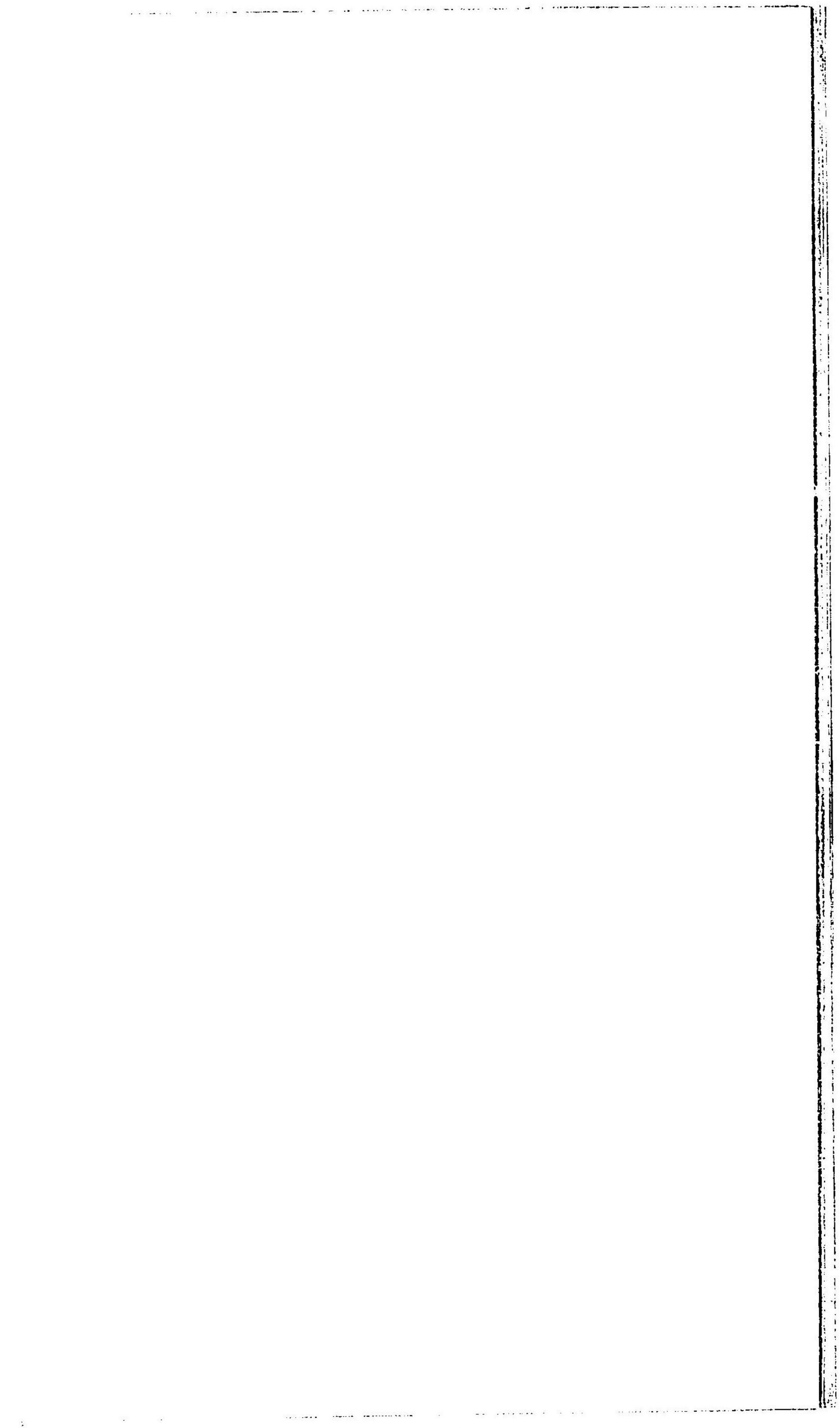
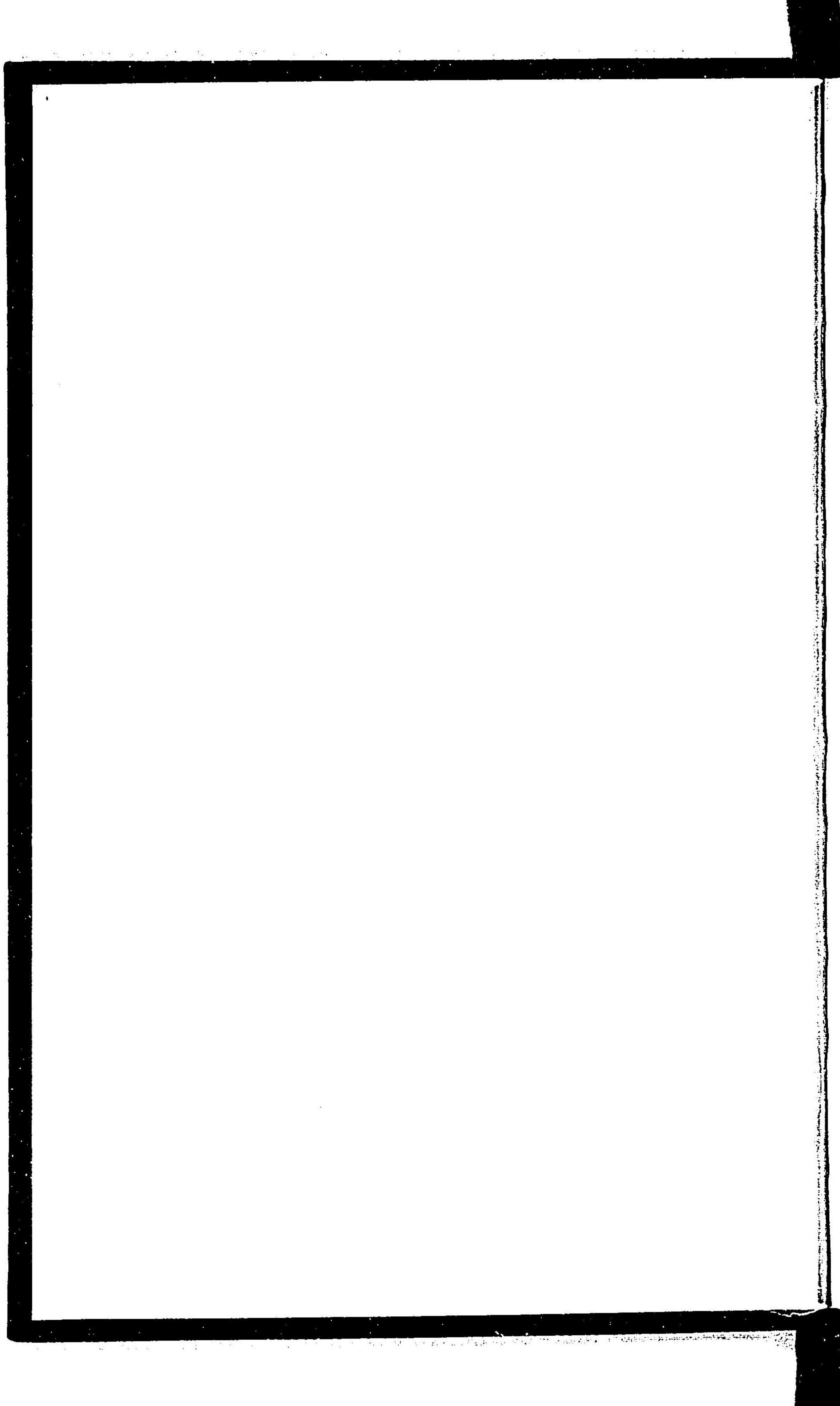
拳骨は人の頭に瘤を拵へる恐しいものごばかり思つて居るのは大間違で、親爺から意見の時に頂戴した拳骨は少し痛いのが後で染々ご難有いところがある、一たび此拳骨が御見舞申せば、小僧は居眠を覺して仰天し、息子は我儘放蕩を止め、又奸悪不正の徒を懲し、亂暴狼藉を防ぐ、拳骨の効用大且つ多なりと云ふべし、本書は拳骨の用ひ方及び受け方を羅列したれば、是非一讀せざれば拳骨よりも先づ罰が當りて人間の役が勤まらざるべし、

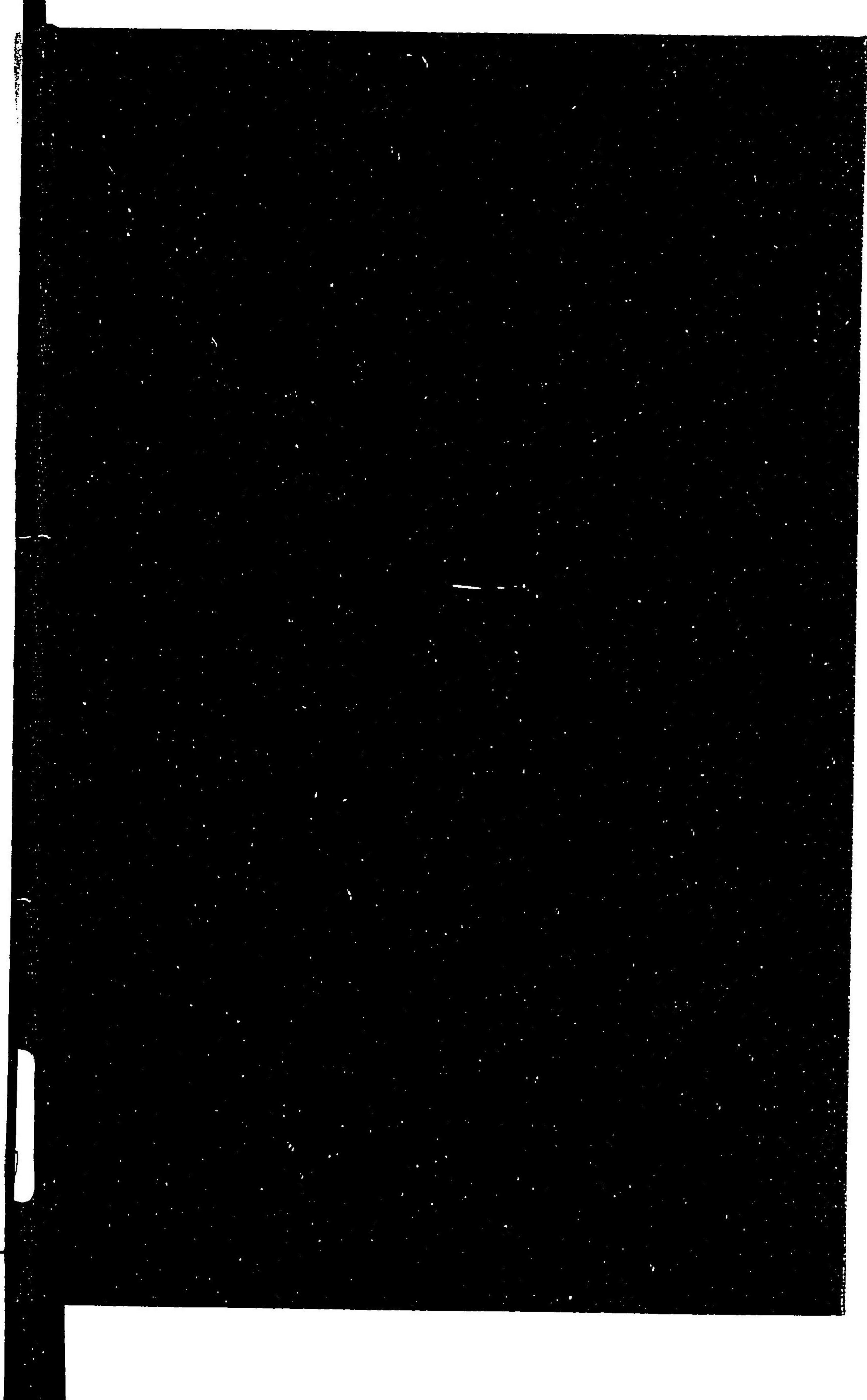
東京神田區錦町一丁目十六番地

發兌元

東京滑稽社

21 1/2





特 11
780

091631-000-6

特 11-780

仰天百画

大月 隆 / 編

M44

DBO-0080



